

木更津市小谷遺跡

—大鷲木更津線埋蔵文化財調査報告書—

平成19年3月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

木更津市小谷遺跡

—大鷲木更津線埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第577集として、千葉県県土整備部の大鷲木更津線建設事業に伴って実施した木更津市小谷遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の集落跡と古墳時代後期から歴史時代の集落跡が発見され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部君津幹線道路建設事務所による地方交付金委託（中烏田・埋蔵文化財調査）事業による大鷲木更津線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は下記の遺跡を収録したものである。
小谷遺跡 千葉県木更津市中烏田字大坪86-11ほか
（遺跡コード 206-033 平成15年度、206-033（2）平成17年度、206-033（3）平成18年度）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、主席研究員 加藤正信が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、君津幹線道路建設事務所、木更津市教育委員会の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「木更津」(N I -54-25-4-2) (平成17年発行)
第3図 木更津市発行 1/2,500地形図「図30 (IX-LE 32-3)、図31 (IX-LE 32-4)、図36 (IX-LE 42-1)、図37 (IX-LE 42-2)」(平成6年発行)を編集
- 8 周辺地形航空写真(図版1・2)は、京葉測量株式会社による昭和42年及び平成18年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。座標値については日本測地系を使用した。
- 10 本書で使用した遺構番号は、基本的には調査時の番号を踏襲したが、調査年度により重複するものがあり、一部本報告書において新たに付与したものがある。その際は旧遺構番号(遺物への注記含む)等を()書きで記載した。記載図面等におけるスクリーントーン及び記号等の用例は本文中に掲載した。遺物実測図の黒塗りの断面は、須恵器を表している。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	3
第2節 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
第2章 検出した遺構・遺物	13
第1節 調査の成果	13
1 旧石器時代	13
2 縄文時代	16
3 古墳時代～奈良時代	37
4 その他	43
第3章 まとめ	45
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 小谷遺跡周辺遺跡 (1/25,000)	2	第13図 礫群1 出土状況・出土石器	20
第2図 小谷遺跡周辺地形 (迅速測図より、1/25,000)	4	第14図 礫群1 組成表	21
第3図 小谷遺跡周辺地形図 (1/5,000)	5	第15図 礫群2 出土状況	22
第4図 小谷遺跡 上層遺構全体分布図	7	第16図 礫群2 出土土器	23
第5図 下層調査全体図	10	第17図 礫群2 出土石器	24
第6図 上層調査全体図	11	第18図 礫群2 組成表	26
第7図 基本層序	13	第19図 礫群3 出土状況・出土遺物	27
第8図 第1ブロック出土状況・出土石器	14	第20図 礫群3 組成表	28
第9図 第2ブロック出土状況・出土石器	15	第21図 礫群4 出土状況・出土遺物	29
第10図 S I - 1 実測図・出土遺物	17	第22図 礫群4 組成表	30
第11図 S K - 1 実測図	18	第23図 礫群5 出土状況・出土石器	31
第12図 土坑実測図・出土遺物	19	第24図 礫群5 組成表	32
		第25図 礫群6 出土状況・出土石器	33

第26図 礫群6 組成表	34	第32図 S I - 2 出土遺物	39
第27図 小谷遺跡全出土礫 組成表	34	第33図 S I - 3 実測図	40
第28図 グリッド等出土縄文土器 (1)	35	第34図 S S - 1 実測図・出土遺物	41
第29図 グリッド等出土縄文土器 (2)	36	第35図 グリッド等出土遺物	43
第30図 グリッド等出土石器	36	第36図 S D - 1・S D - 2 実測図・出土遺物	44
第31図 S I - 2 実測図	38		

表目次

第1表 第1ブロック出土石器計測表	14	第5表 礫群2出土石器計測表 (2)	26
第2表 第2ブロック出土石器計測表	16	第6表 礫群5出土石器計測表	32
第3表 礫群1出土石器計測表	21	第7表 礫群6出土石器計測表	33
第4表 礫群2出土石器計測表 (1)	25	第8表 グリッド等出土石器計測表	37

図版目次

図版1 小谷遺跡周辺航空写真 (昭和42 (1963) 年撮影) 約1/10,000	図版9 礫群5出土状況 S I - 2 遺物出土状況 S I - 2 カマド周辺遺物出土状況
図版2 小谷遺跡周辺航空写真 (平成18 (2006) 年撮影) 約1/10,000	図版10 S I - 2 全景 S I - 2 カマド煙道~袖・支脚 S I - 3 断面 (西から)
図版3 調査前風景 調査前風景 第2ブロック遺物出土状況 (南から)	図版11 S I - 3 完掘 (東から) S I - 3 カマド検出状況 (東から) S S - 1 断面 B ~ B' (南西から)
図版4 3E-72グリッド遺物出土状況 (東から) 3E-72グリッド調査状況 (東から) 第1ブロック西側壁面土層断面	図版12 S S - 1 断面 A ~ A' S S - 1 遺物出土状況 (東から) S S - 1 完掘 (北西から)
図版5 S I - 1 完掘 (北西から) S K - 1 断面 S K - 1 全景	図版13 第1ブロック、第2ブロック出土石器 各礫群出土石器
図版6 S K - 3 完掘 S K - 2 完掘 (南西から) S I - 1 炉1断面 (北東から)	図版14 グリッド等出土縄文土器 (1)
図版7 S I - 1 炉1完掘 (北東から) S I - 1 炉2断面 (南西から) S I - 1 炉2完掘 (南西から)	図版15 グリッド等出土縄文土器 (2) 礫群2出土縄文土器
図版8 S I - 1 炉3完掘 (南西から) S D - 2 完掘 (南東から) 調査風景 (平成18年度)	図版16 縄文時代出土礫石器 礫群1出土礫
	図版17 礫群2出土礫 礫群4出土礫 礫群3・4出土土器

図版18 古墳時代～奈良時代出土土器 (1)

SI-2

図版19 古墳時代～奈良時代出土土器 (2)

SI-2, SS-1, SD-1,

グリッド出土

図版20 古墳時代～奈良時代出土土器 (3)

グリッド等出土

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

木更津市周辺は、東京湾横断道路（アクアライン）が完成し、それに続いて接続する首都圏中央連絡自動車道の建設事業や周辺地域の道路網整備が徐々になされてきている。また区画整理方式による住宅地の開発も数多く行われてきており、それらに伴って幹線・支線の道路整備も行われ、その一環として木更津市街地の南側に延びる道路の必要性が高まり、今回市街地から南部方面への街路の整備が進められ、大鷲木更津線の整備が図られることとなった。

事業実施にあたって千葉県土木部（現 県土整備部）君津幹線道路建設事務所から事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会あてに提出された。千葉県教育委員会ではこれを受けて、事業地内の現地踏査を実施し、事業地内に埋蔵文化財が所在する旨の回答を行った。この回答を受けて、関係機関で協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な地点について、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県県土整備部と財団法人千葉県教育振興財団の間で委託契約が締結され調査が実施された。

小谷遺跡の現地調査は、用地取得の状況により平成15年度、17年度、18年度の3年度にわたって行われ、18年度に整理作業を実施し報告書を刊行することとなった。年度ごとの組織、調査内容、担当者等については以下の通りである。

平成15年度

調査期間 平成16年1月6日～同年2月27日

確認調査（上層）710㎡／4,422㎡

確認調査（下層）148㎡／4,422㎡

調査部長 齋木 勝 南部調査事務所長 鈴木定明 担当者 上席研究員 地引尚幸

平成17年度

調査期間 平成17年7月1日～同年8月19日

確認調査（上層）400㎡／1,600㎡

確認調査（下層）64㎡／1,600㎡

調査部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博 担当者 上席研究員 石川 誠

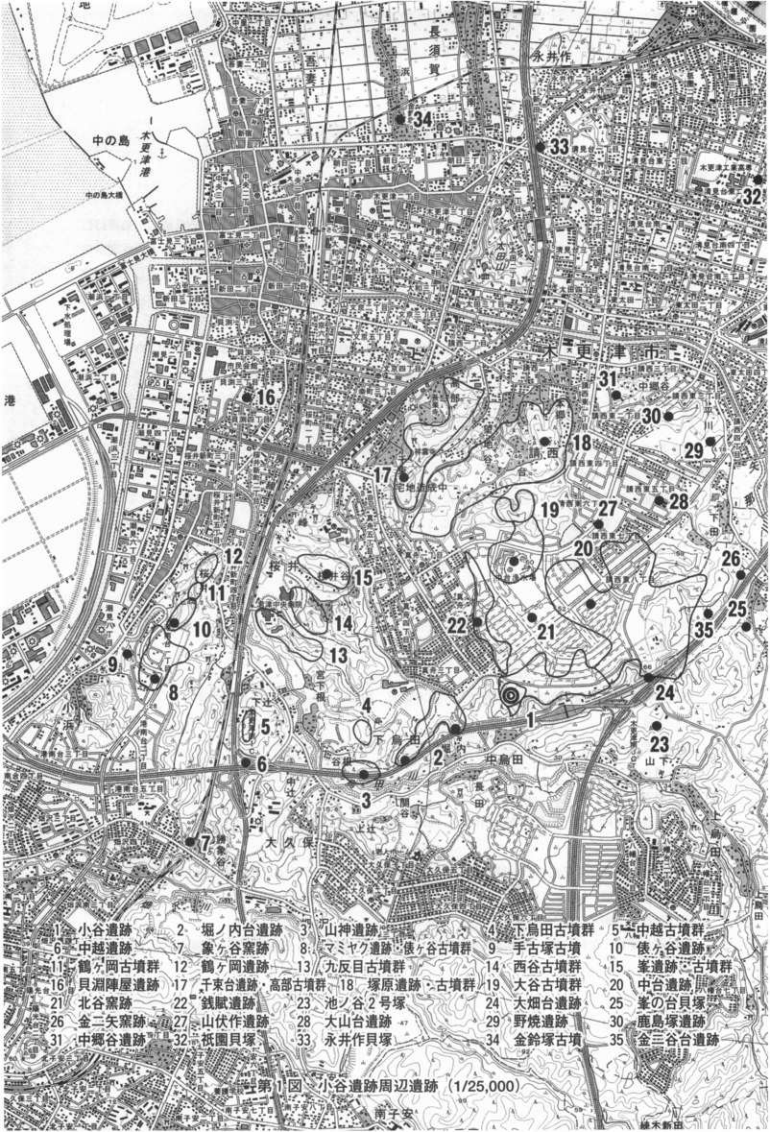
平成18年度

調査期間 平成18年7月1日～同年7月14日（現地調査）、同年8月1日～同年11月30日（整理）

確認調査（上層）350㎡／350㎡

確認調査（下層）14㎡／350㎡

調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博 担当者 主席研究員 加藤正信



- | | | | | |
|-----------|----------------|-----------------|----------|------------|
| 1 小谷遺跡 | 2 堀ノ内台遺跡 | 3 山神遺跡 | 4 下鳥田古墳群 | 5 中越古墳群 |
| 6 中越遺跡 | 7 象ヶ谷竪穴跡 | 8 マミヤク遺跡・儀ヶ谷古墳群 | 9 手古塚古墳 | 10 儀ヶ谷遺跡 |
| 11 鶴ヶ岡古墳群 | 12 鶴ヶ岡遺跡 | 13 九反目古墳群 | 14 西谷古墳群 | 15 葦遺跡・古墳群 |
| 16 貝淵陣屋遺跡 | 17 千束台遺跡・高部古墳群 | 18 塚原遺跡・古墳群 | 19 大谷古墳群 | 20 中台遺跡 |
| 21 北谷竪穴跡 | 22 銭賦遺跡 | 23 池ノ谷2号塚 | 24 大畑台遺跡 | 25 葦の台貝塚 |
| 26 金二矢竪穴跡 | 27 山伏作遺跡 | 28 大山台遺跡 | 29 野焼遺跡 | 30 鹿島塚遺跡 |
| 31 中郷谷遺跡 | 32 祇園貝塚 | 33 永井作貝塚 | 34 金鈴塚古墳 | 35 金三谷台遺跡 |

第11図 小谷遺跡周辺遺跡 (1/25,000)

2 調査の方法

(1) 発掘調査

調査対象地に対して原則的に上層10%、下層（ローム層）4%の確認調査を実施し、遺構・遺物の検出された範囲を拡張して調査を実施した。まず上層の調査として、調査対象地にトレンチを随時設定し重機を主体として表土を除去し、人力による精査を行った。各年度共に遺構・遺物の密度がそれほど高くはなく、確認調査のトレンチを部分的に拡張する程度の拡張方法で対処できたので、本調査への移行という段階を経ること無しに確認調査の拡張の範囲内で発掘調査を終了することができた。そのため各年度によって対象面積の10%の面積の確認では終わらずに、拡張された部分の面積も確認調査の面積に参入されているために年度ごとの面積の割合は均一ではなくなっている。18年度は調査対象の面積が350㎡と狭く、重機によって表土を全面的に除去し、精査を行い遺構・遺物の検出を行ったため確認調査面積が対象地と等しくなっている。

下層はソフトローム層以下の層を対象に下層の確認調査を面積比で4%の割合で人力で実施し、武蔵野ローム層直上面まで遺物の有無を確認した。上層同様に遺物の検出された部分の拡張を行い、調査を実施した。

(2) 整理作業

調査対象地の調査がすべて終了した18年度に整理作業をまとめて実施し、報告書の刊行を行った。整理期間は18年8月1日から11月30日までの4か月間で、出土遺物の水洗・注記に始まり、遺物の接合・復原、実測土器の選択後、拓本、実測、写真撮影を行い、現地調査で計測・撮影した遺構等の図面・写真をもとに編集・トレースを行い、報告書に掲載した。

遺物包含層より出土の縄文時代早期の土器と礫群は、特に礫群に関しては大量に出土しているため、出土地区ごとに石材別等の分類による集計作業を行い、その結果を表・グラフで掲載した。

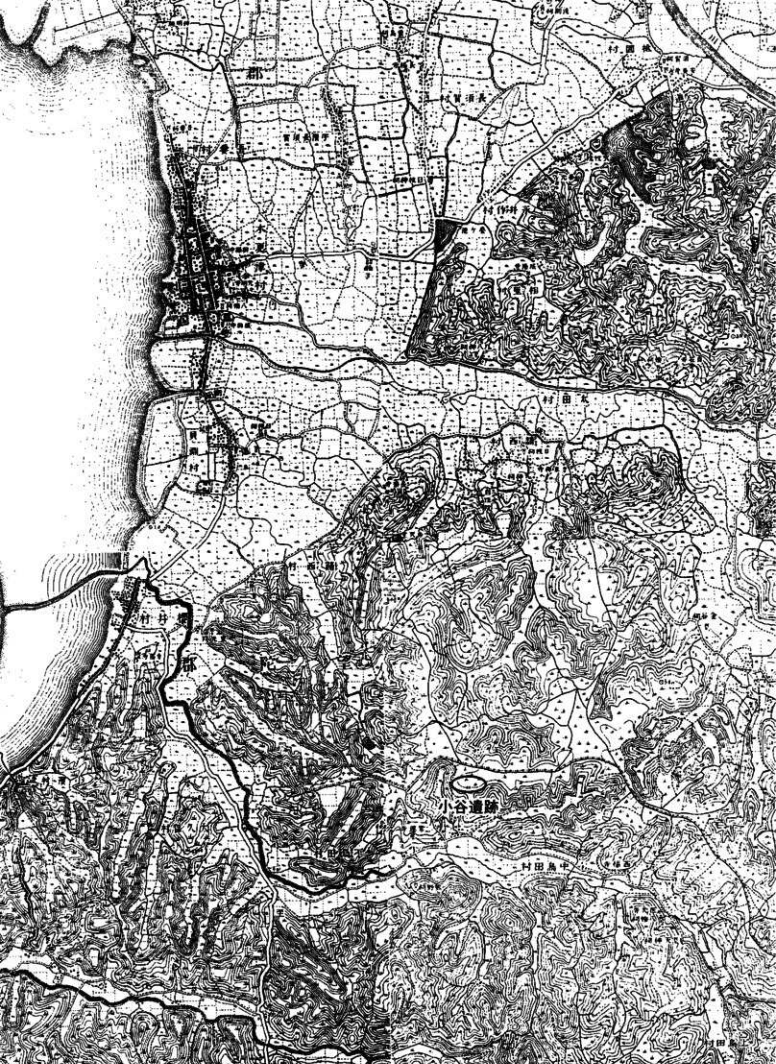
第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第1・2図）

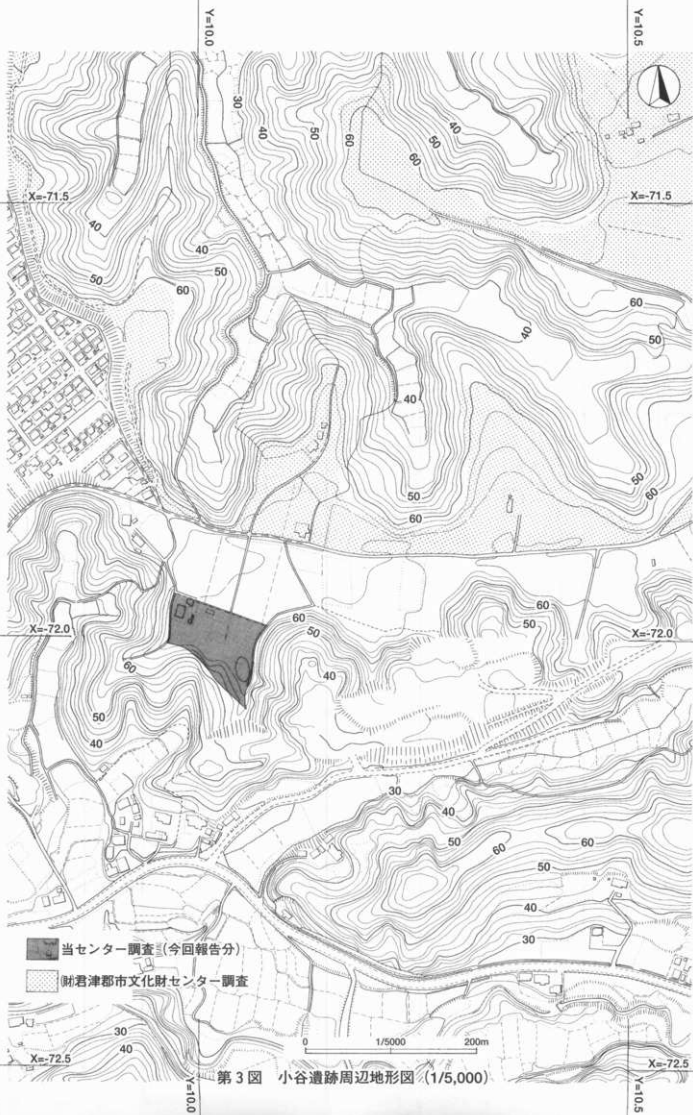
小谷遺跡は、木更津市の南側の台地上に位置し、JR木更津駅より南側に約3kmほど離れている。遺跡の立地する台地上は比較的平坦で標高は約60mである。遺跡の南側は西に位置する東京湾に流入する烏田川の開析谷に面し、樹脂状に開析された谷が北西方向を主体として入り込んでいる。谷の標高は約20mほどで台地上との比高は約40mほどである。遺跡の位置する台地は北側では木更津市中心部を流れる矢那川に開析されており、南北を河川に挟まれ東側が房総丘陵の背骨に当たる中央分水嶺の方向に向かい尾根が高く連なっている。

2 歴史的環境（第1～6図）

小谷遺跡（1）周辺は、貝塚や古墳群・大集落遺跡が多く存在することが古くから知られてきていたが、それらの中の一部は、古くは明治時代末期から昭和40年代にかけて学術調査が行われてきた。祇園貝塚（32）・永井作貝塚（33）等の縄文時代の貝塚や金鈴塚古墳（34）等が学術調査の対象として取り上げられてきた。昭和50年代になって旧市街地の東側の台地を中心に大規模な土地区画整理事業が行われるよう



第2図 小谷遺跡周辺地形(迅速測図より、1/25,000)



第3図 小谷遺跡周辺地形図 (1/5,000)

になり、それに伴い主に財団法人君津都市文化財センター（昭和58年設立、平成17年解散）によって発掘調査が大規模に実施され、多くの成果を上げてきた。しかし烏田川の南側の台地は、開発時期が古く、資料的に空白の部分が多い。近年、東関東自動車道建設に伴った調査が当センターによって実施され、木更津市南部から君津市の北部の境界部分に調査の跡を入れてきている。以下時代別に周辺の歴史的環境を概観してみることにする。

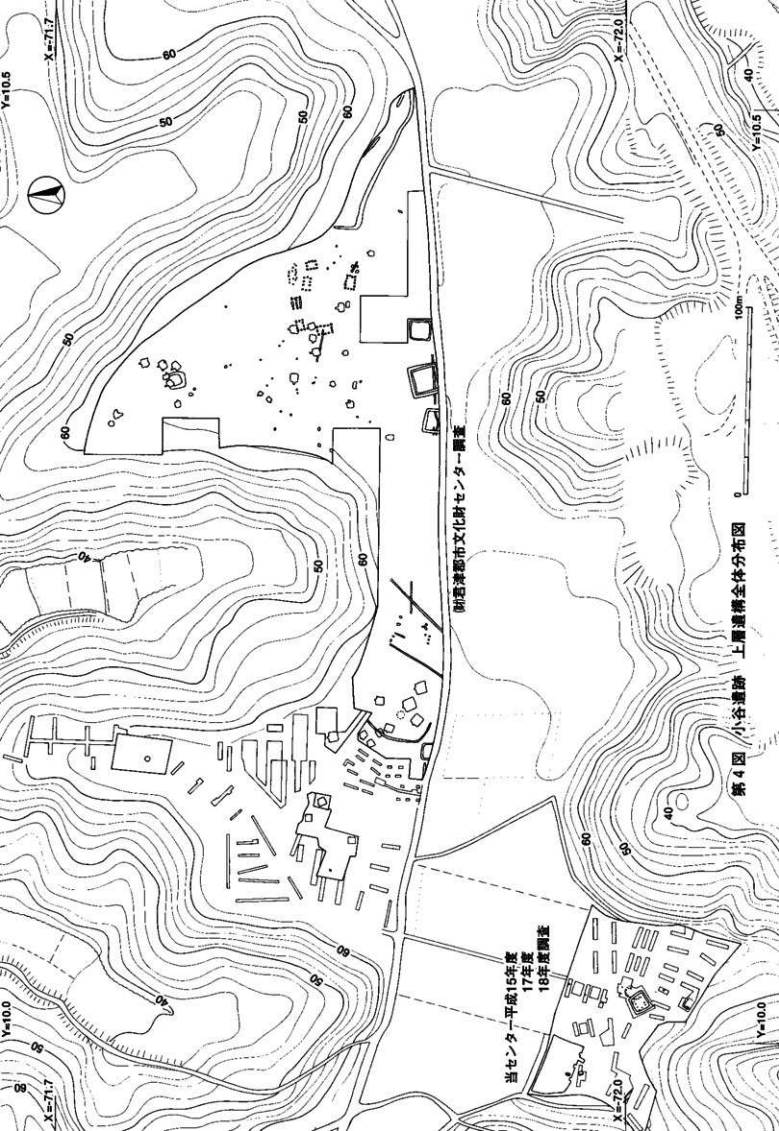
旧石器時代の遺跡は、先の東関東自動車道建設に伴う当センターの調査によって中越遺跡¹⁰⁶（6）、堀ノ内台遺跡¹⁰⁷（2）、金二矢台遺跡¹⁰⁸（35）で石器のブロックが検出されている。その内中越遺跡では、9ブロック、金二矢台遺跡では12ブロックの石器群が、Ⅳ～Ⅵ層中心に展開している。それ以外の調査でも大畑台遺跡¹⁰⁹（24）、マミヤク遺跡¹¹⁰（8）、天神前遺跡¹¹¹、蓮華寺遺跡¹¹²などで石器ブロックが検出されている。

縄文時代になると遺跡数が増加し、早期では金二矢台遺跡¹⁰⁸（35）、堀ノ内台遺跡¹⁰⁷（2）、誦西遺跡群¹¹³の中の野焼B遺跡¹¹⁴（29）、塚原遺跡¹¹⁵（18）、千東台遺跡¹¹⁶（17）、大畑台遺跡群¹¹⁷の中の小谷遺跡¹¹⁸、銭賦遺跡¹¹⁹（22）、大畑台遺跡で礫群が検出されている。また早期の炉穴は、野焼B遺跡¹¹⁴、天神前遺跡¹¹¹、陥穴は天神前遺跡¹¹¹、中越遺跡¹⁰⁶、前期竪穴住居跡は大畑台遺跡¹⁰⁹で検出されている。中期以降は集落の検出例はなく、天神前遺跡¹¹¹で土器が出土している。土器の出土例では、マミヤク遺跡¹¹⁰で草創期から後期の土器が、永井作貝塚¹²⁰（33）、三直貝塚¹²¹（君津市、当センター調査）では堀ノ内式・加曾利B式・安行式などの後期の土器が、祇園貝塚¹²²、峯の台貝塚¹²³（25）では阿玉台式・勝坂式・加曾利E式、称名寺式・加曾利B式・安行式など中・後期の土器が採集されている。

弥生時代では中期の集落として誦西遺跡群¹¹³の鹿島塚A遺跡¹²⁴（30）、大山台遺跡¹²⁵（28）、山伏作遺跡¹²⁶（27）、野焼遺跡¹¹⁴（29）、千東台遺跡¹¹⁶（17）があげられる。その中でも鹿島塚A遺跡¹²⁴（30）、千東台遺跡¹¹⁶（17）では環濠集落が検出されている。やや隔たるが小櫃川脇の沖積地の菅生遺跡¹²⁷では小区西の水田が多数配置された生産地遺跡が検出されている。後期には誦西遺跡群¹¹³の中郷谷遺跡¹²⁸（31）、大山台遺跡¹²⁵（28）、野焼遺跡¹¹⁴（29）、千東台遺跡¹¹⁶（17）、天神前遺跡¹¹¹、塚原遺跡¹¹⁵（18）、マミヤク遺跡¹¹⁰（8）等で集落が営まれ、方形周溝墓も野焼遺跡¹¹⁴、大畑台遺跡¹⁰⁹で検出されている。

古墳時代では、弥生時代の集落を引き継ぐような形で、誦西遺跡群¹¹³をはじめとする台地上の縁辺部に立地する集落遺跡と、台地の内部に古墳群が形成される傾向が見られる。一方低地にあたる沖積地の砂丘列上においても金鈴塚古墳¹²⁹（34）に代表される古墳が散見される。一部の丘陵斜面部には横穴墓群が形成されている。前期の遺跡では、大畑台遺跡群¹¹⁷の中台遺跡¹³⁰（20）、誦西遺跡群¹¹³の野焼遺跡¹¹⁴（29）・千東台遺跡¹¹⁶、マミヤク遺跡¹¹⁰、俵ヶ谷遺跡¹³¹（8）、中越遺跡¹⁰⁶（6）、蓮華寺遺跡¹¹²などで集落が展開するようになる。中越遺跡¹⁰⁶では当センターの調査により竪穴住居跡覆土から小銅鐸が検出されている。前期の古墳は大畑台遺跡¹⁰⁹、野焼遺跡¹¹⁴、手古塚古墳¹³²（9）などがあげられる。中期では集落遺跡では、大畑台遺跡¹⁰⁹の中台遺跡¹³⁰（20）、大畑台遺跡¹⁰⁹、銭賦遺跡¹¹⁹（22）、小谷遺跡¹¹⁸（1）、野焼A遺跡¹³³、中郷谷遺跡¹²⁸（31）、山伏作遺跡¹²⁶、大山台遺跡¹²⁵、千東台遺跡¹¹⁶、塚原遺跡¹¹⁵、天神前遺跡¹¹¹、マミヤク遺跡¹¹⁰、俵ヶ谷遺跡¹³¹に集落が営まれる。後期には集落は小谷遺跡¹¹⁸、銭賦遺跡¹¹⁹、中台遺跡¹³⁰、大畑台遺跡¹⁰⁹、中郷台遺跡¹³⁴、山神遺跡¹³⁵（3）、中越遺跡¹⁰⁶、峯遺跡¹³⁶（15）、マミヤク遺跡¹¹⁰、俵ヶ谷遺跡¹³¹と主に烏田川沿いに展開する。後期の古墳群は集落の消えた鹿島塚遺跡¹²⁴、千東台遺跡¹¹⁶などに見られる。

奈良・平安時代は烏田川に面した台地上の縁辺部に集落が分布する。この地域は『和名抄』の周准郡にあたり北側の小櫃川流域の沖積低地は望陀郡に比定されている。大畑台遺跡¹⁰⁹では8世紀後半～9世紀の前



町高津町市文化財センター調査

当センター平成15年度
17年度
19年度調査

第4図 小谷遺跡 上層遺構全体分布図

半の集落と掘立柱建物跡、銭賦遺跡では8世紀以降の火葬墓・方形墳墓、小谷遺跡では8世紀～9世紀の集落・基壇建物・火葬墓・方形墳墓、中台遺跡では8世紀後半～9世紀前半の集落が検出されている。鹿島塚遺跡では集落、野焼遺跡では集落・円形周溝状遺構、天神前遺跡では方形周溝状遺構、中越遺跡・山神遺跡で集落が検出されている。小谷遺跡では瓦葺基壇建物跡が検出され、瓦塔・瓦堂などの仏教関連遺物が出土し、周辺から火葬墓が多く検出されている。そのほかには石櫃が合計3基検出された金二矢台遺跡・堀ノ内台遺跡などがあり周辺一帯の遺跡で集落・寺院・墓地という相互に関連を持って構築されたような遺跡群の存在があげられる。古代寺院としては小櫃川流域の川原寺系軒丸瓦の上総大寺、君津市の山田寺系軒丸瓦の九十九坊庵寺が調査されており、前者は望陀郡寺に後者は周准郡寺と推定されている。瓦窯としては象ヶ谷窯跡（7）、金二矢窯跡（26）などがあげられる。

中世は周東郡に含まれるが中世前期は不明な点が多く、小櫃川流域の沖積地では12世紀から14世紀にかけては菅生荘が藤原家や近衛家によって維持されており、菅生荘にあたる菅生遺跡の調査では、当該期の遺物を伴う館跡の堀が検出されている。中世後期には15世紀後半から真里谷城を本拠とした真里谷武田氏が領域化し、16世紀中頃以降の武田氏の衰退により後北条氏と里見氏の領域拡大の紛争の地域となっている。中世城館跡としては中尾城跡、舘西城跡、大坪城跡が台地上に存在する。近世には貝淵藩の貝淵陣屋遺跡（16）、それを継承した舘西藩の真武根陣屋が作られた。

注

(1) 木更津市 1972 『木更津市史』

(2) (1) に同じ

(3) (1) に同じ

木更津市教育委員会 2000 『木更津市文化財調査集報 4－伊豆山遺跡・金鈴塚古墳－』

(4) (財) 千葉県文化財センター 2002 『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書11－木更津市中越遺跡－』

(5) (財) 千葉県文化財センター 2000 『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書6－木更津市堀ノ内台遺跡－』

(6) (財) 千葉県文化財センター 2000 『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書6－木更津市金二矢台遺跡－』

(財) 千葉県文化財センター 2004 『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書2－金二矢台遺跡・南羽鳥遺跡－』

(7) 木更津市教育委員会 1996 『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅰ－大畑台遺跡Ⅰ－』

木更津市教育委員会 1997 『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅱ－大畑台遺跡Ⅰ－』

(8) (財) 君津都市文化財センター 1989 『小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡』

(9) (財) 君津都市文化財センター 1992 『天神前遺跡発掘調査報告書』

(10) (財) 君津都市文化財センター 1994 『蓮華寺遺跡Ⅱ』

(11) 木更津市教育委員会 1991 『舘西遺跡群発掘調査報告書Ⅱ－野焼B遺跡・野焼古墳群第2号墳・鹿島B遺跡・中郷谷遺跡Ⅰ－』

(12) (財) 君津都市文化財センター 1996 『千束台遺跡』『塚原遺跡』『年報No.13』

(13) (財) 君津都市文化財センター 1995 『千束台遺跡』『年報No.12』

(14) 木更津市教育委員会 1998 『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅲ－小谷遺跡Ⅰ－』

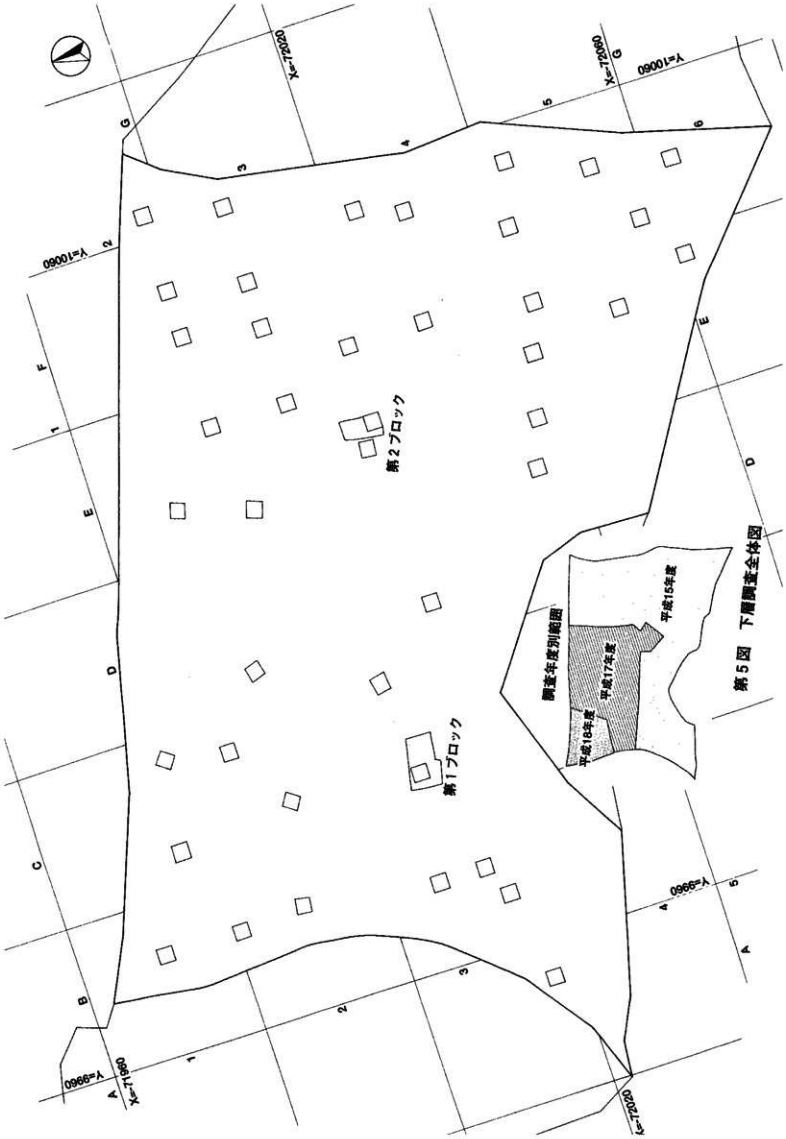
木更津市教育委員会 2003 『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅵ－小谷遺跡（2）Ⅰ－』

(15) 木更津市教育委員会 2002 『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅳ－銭賦遺跡Ⅰ－』

(16) (財) 千葉県教育振興財団 2006 『君津市三直貝塚』『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書7』

(17) (財) 君津都市文化財センター 1994 『舘西遺跡群Ⅲ－鹿島塚A遺跡Ⅰ－』

- (18) 木更津市教育委員会 1990 『請西遺跡群Ⅱ—大山台遺跡—』
- (19) 木更津市教育委員会 1994 『請西遺跡群Ⅴ—山伏作遺跡—』
- (20) (財)千葉県文化財センター 1997 『一般国道409号(木更津工区)埋蔵文化財調査報告書—木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群—』
- (21) 木更津市教育委員会 1991 『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅲ—野焼B遺跡・野焼古墳群第2号墳・鹿島B遺跡・中郷谷遺跡—』
- (22) 中台遺跡発掘調査委員会 1983 『中台遺跡発掘調査報告書』
- (23) (財)君津郡市文化財センター 1991 『小浜遺跡群Ⅳ 俵ヶ谷遺跡』
- (24) 杉山晋作 1973 「千葉県木更津市手古塚古墳調査速報」『古代』第65号 早稲田大学考古学会
杉山晋作 2003 「手古塚古墳」『千葉県の歴史』資料編 考古2(弥生・古墳時代)
- (25) (財)千葉県文化財センター 2003 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書12—木更津市山神遺跡・嵐ノ内台遺跡(2)—』
- (26) 峯遺跡発掘調査団 1983 『峯遺跡発掘調査報告書』



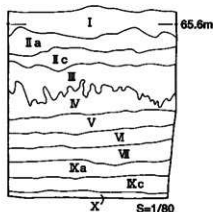
第2章 検出した遺構・遺物

第1節 調査の成果

1 旧石器時代

3年度にわたる調査の中で、旧石器時代の遺物が検出されたのは2か所からである。3C-43グリッド周辺の確認調査でⅥ層からⅧ層にかけての3点出土の地点（第1ブロック）と、3E-73・74グリッド周辺からの25点ほど出土の地点（第2ブロック）である。そのうち第2ブロックは石器の出土層がⅣ層からⅦ層にかけてのまとまりと、Ⅷ層を中心とするまとまりに分けられそうである。

確認調査ではソフトローム上層から武蔵野ローム層直上にあたる層を目標に確認調査を実施し人力による精査を行い掘り下げを行ったが、掘削部分が深く安全上の配慮により、実際には武蔵野ローム層上層までの確認をすることはできなかった。本遺跡における第1ブロックの部分土層断面を基本層序として提示する（第7図）。



第7図 基本層序

小谷遺跡 基本層序 旧石器1ブロック北壁断面

- | | | |
|---------|-------|---|
| I層 | 暗褐色土 | 夾土 落葉による腐植土を多く含む。 |
| II a層 | 暗褐色土 | 落葉による腐植土を含む。 |
| II c層 | 暗褐色土 | 腐植土・黄褐色土が混入している。しまりが無い。 |
| III層 | 黄褐色土 | ソフト・ローム層。木炭による攪乱が多い。しまりが無い。 |
| IV層 | 黄褐色土 | 径1mm～2mm程度の赤色スコリアを全体に含む。小径の黒色スコリア・緑色スコリアを全体に含む。しまっている。 |
| V層 | 暗黄褐色土 | 更に小径の赤色スコリア・黒色スコリア・緑色スコリアを全体に含む。黒色スコリアが目立つ。しまっている。 |
| VI層 | 明褐色土 | 赤色スコリア・黒色スコリア・緑色スコリアを全体に含むが、粒径は細かい。ガラス質が目立つ。しまっている。ATを含む層。 |
| VII層 | 暗褐色土 | 全体に多くのスコリアを含む。赤色スコリアは径3mm～10mmで多く含む。その他のスコリアも径5mm程度のものも見られる。しまっている。 |
| VIII a層 | 暗褐色土 | 全体にスコリアを多く含むが、径は3mm程度のものが多く、量は少ない。しまっている。 |
| VIII c層 | 暗褐色土 | スコリアを含むが径1mm程度の小径である。しまっている。 |
| X層 | 暗黄褐色土 | スコリアを少し含むが目立たない。しまっている。 |

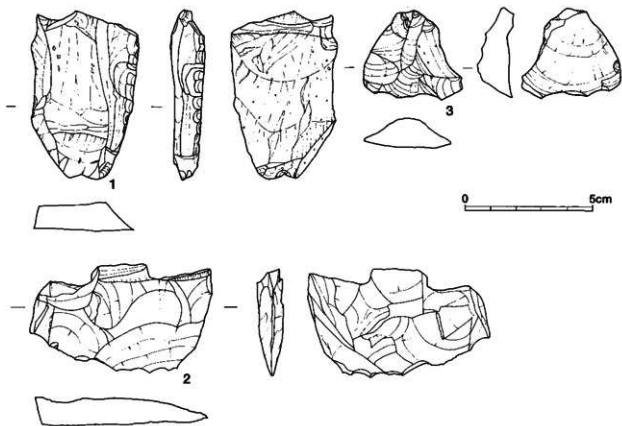
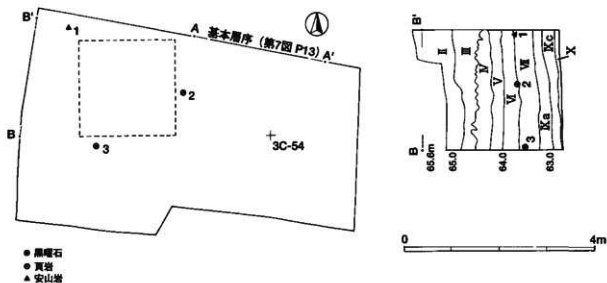
第1ブロック（調査時 206-033 5 T）（第8図、第1表）

3C-43グリッドの確認調査グリッドを中心にⅥ層～Ⅷ層の境界付近の層から3点が出土したブロックである。大型の安山岩製の縦長剥片1点、頁岩・黒曜石製の調整剥片各1点の計3点である。出土層位は安山岩がⅥ層上層、頁岩がⅥ層下層、黒曜石がⅥ層上層とほぼ同一のレベルに近く、層序の傾斜を考えると高度差は0.2m程度に収まり、同じ文化層の所産と見られる。3点は水平距離では互いに約2.2m～2.8m隔たっている。

1は安山岩の縦長剥片を折断した大型の剥片である。刃部右側にはブランディングが認められる。2は頁岩の横長剥片である。3は黒曜石の剥片である。

第2ブロック（調査時 206-033 7 T）（第9図、第2表）

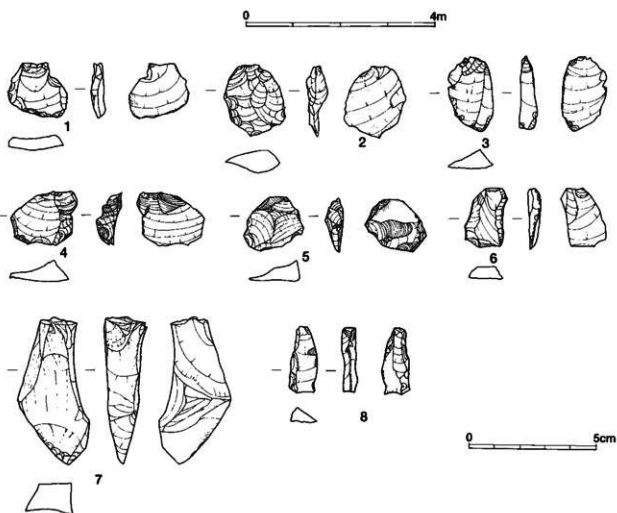
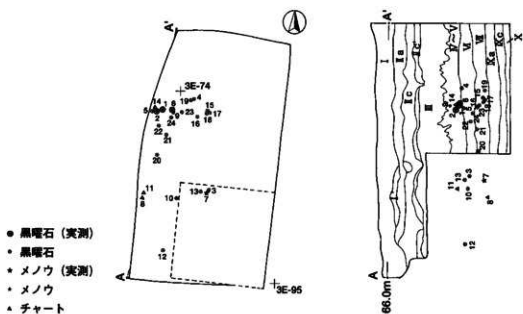
3E-73・74グリッドを中心に黒曜石を主とする計25点ほどの石器出土ブロックである。遺物の出土の範囲は、水平的には狭く集中しており、垂直的には最大約0.8mと幅のある出土状態である。遺物の出土状況を見ると、Ⅳ層～Ⅶ層中とその下のⅧ層からの出土のブロックとⅧ層からの出土のブロックとの2つの文化層に分類できそうである。



第8図 第1ブロック出土状況・出土石器

検出番号	遺構・グリッド	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第8図1	第1ブロック(5T)	10	大型厚長削片	66.0	41.7	11.7	44.63	安山岩	安山岩	VI	II	
第8図2	第1ブロック(5T)	3	調整削片(RF)	42.9	67.9	10.5	30.73	頁岩	頁岩2	VI	II	
第8図3	第1ブロック(5T)	9	調整削片(RF)	35.6	39.7	11.1	11.08	黒曜石	黒曜石2	VI	II	

第1表 第1ブロック出土石器計測表



第9図 第2ブロック出土状況・出土石器

上層の文化層（文化層Ⅰ）は、黒曜石9点、チャート2点、メノウ1点の計12点で、黒曜石製のエンドスクレーパー1点、調整剥片2点、その他の剥片類9点である。黒曜石を主体とするブロックで1はエンドスクレーパー、2～6は調整痕の認められる黒曜石の小剥片である。

下層の文化層（文化層Ⅱ）は、黒曜石11点、チャート1点、メノウ1点の計13点となる。メノウのやや大型の剥片1点、チャートの小剥片1点、黒曜石の剥片・砕片11点で、成品はない。7はやや大型のメノウの剥片である。8はチャートの小形縦長剥片である。

検出番号	遺構・グリッド	遺物番号	器物	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第9図1	第2ブロック(7T)	23	エンドスクレーパー	21.0	24.5	4.5	2.30	黒曜石	黒曜石7	N~V	I	
第9図2	第2ブロック(7T)	13	調整剥片(RF)	27.2	22.0	8.9	4.23	黒曜石	黒曜石4	N~V	I	
第9図3	第2ブロック(7T)	16	剥片	29.0	21.5	6.1	2.83	黒曜石	黒曜石6	VI	I	
第9図4	第2ブロック(7T)	14	剥片	20.1	26.6	7.6	3.10	黒曜石	黒曜石1	VI	I	
第9図5	第2ブロック(7T)	25	剥片	20.5	23.5	7.6	2.52	黒曜石	黒曜石1	VI	I	
第9図6	第2ブロック(7T)	20	調整剥片(RF)	24.2	20.6	4.1	1.71	黒曜石	黒曜石3	N~V	I	
第9図9	第2ブロック(7T)	12	剥片	10.1	13.8	4.7	0.63	メノウ	メノウ1	N~V	I	
第9図10	第2ブロック(7T)	4	剥片	17.7	8.4	4.2	0.52	黒曜石	黒曜石3	VI	I	
第9図11	第2ブロック(7T)	8	剥片	18.0	23.4	5.4	1.97	チャート	チャート3	N~V	I	
第9図12	第2ブロック(7T)	15	剥片	6.7	8.0	0.5	0.05	黒曜石	黒曜石2	N~V	I	
第9図13	第2ブロック(7T)	16	剥片	5.9	5.5	0.5	0.03	黒曜石	黒曜石2	N~V	I	
第9図14	第2ブロック(7T)	21	剥片	16.3	15.2	3.4	1.23	チャート	チャート4	N~V	I	
第9図7	第2ブロック(7T)	5	大型剥片	56.8	25.8	18.0	17.71	メノウ	メノウ1	VI	II	
第9図8	第2ブロック(7T)	22	剥片	25.1	10.1	5.0	1.63	チャート	チャート5	VI	II	
第9図15	第2ブロック(7T)	9	剥片	22.6	19.9	7.3	2.63	黒曜石	黒曜石6	VI	II	
第9図16	第2ブロック(7T)	10	剥片	5.9	8.8	1.0	0.04	黒曜石	黒曜石1	VI	II	
第9図17	第2ブロック(7T)	6	剥片	27.3	17.0	6.8	2.91	黒曜石	黒曜石6	VI	II	
第9図18	第2ブロック(7T)	17	剥片	17.2	16.9	9.0	2.24	黒曜石	黒曜石6	VI	II	
第9図19	第2ブロック(7T)	19	剥片	19.3	12.8	4.9	0.99	黒曜石	黒曜石6	VI	II	
第9図20	第2ブロック(7T)	27	剥片	9.4	7.5	2.7	0.15	黒曜石	黒曜石6	VI	II	
第9図21	第2ブロック(7T)	28	剥片	9.9	8.1	1.7	0.15	黒曜石	黒曜石4	VI	II	
第9図22	第2ブロック(7T)	29	剥片	7.6	12.5	4.9	0.46	黒曜石	黒曜石4	VI	II	
第9図23	第2ブロック(7T)	30	砕片	5.6	2.9	0.7	0.02	黒曜石	黒曜石2	VI	II	
第9図24	第2ブロック(7T)	31	剥片	9.0	9.9	4.0	0.38	黒曜石	黒曜石4	VI	II	
	第2ブロック(7T)	32	剥片	10.1	4.9	4.8	0.20	黒曜石	黒曜石6	VI	II	地点不明

第2表 第2ブロック出土石器計測表

2 縄文時代

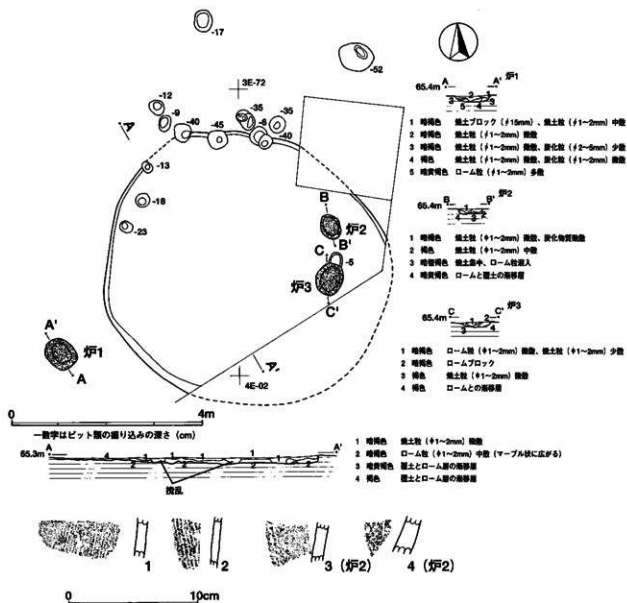
縄文時代の検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、陥穴1基、土坑4基、礫（焼礫）群6地点で、出土遺物は早期燃糸文の縄文土器、敲石、焼礫を主とした群である。

(1) 竪穴住居跡

SI-1（調査時 206-033 (2) SI-002）(第10図)

調査時の遺存状況の非常に悪い遺構である。検出できた遺構の掘り込みは最大で約15cmで、全周するプランが確認できたわけではない。また焼土の検出されたビットが本遺構の掘り込み範囲内に2基、範囲外の近隣に1基存在し、それを住居の炉として想定すると、調査で検出できなかった住居跡状の遺構の掘り込みが複数存在していた可能性が十分考えられる。検出された部分の状況では、南東側が検出できず、さらに確認調査時に遺構の一部を掘り抜いてしまったことなどからも、当初遺構として認識することは難しく、確認後の住居の掘り込みや床面、形状の把握は困難であった。

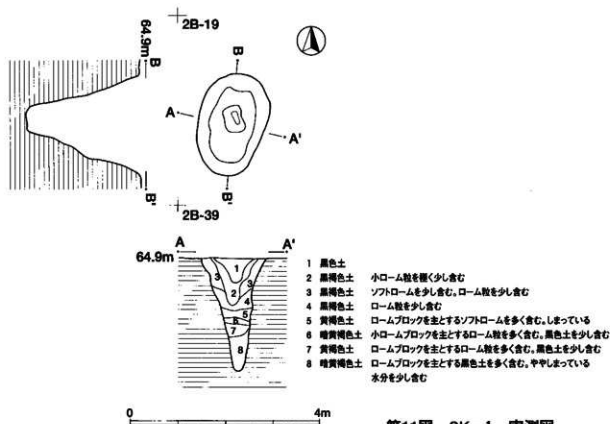
遺存の悪い中で推定復元した形状は、ほぼ円形で直径約5.8m～6.0mとなる。該期の竪穴住居跡としてこの形状が妥当かどうかという根本的な問題が存在するが、調査時の所見を元に推定形状とする。床面は特に堅緻とかいうことはないが平坦である。床面にはプランの中心には位置しないが、炉と見られる底面が焼けた焼土遺構が3基検出された。本遺構の本来の炉とは考えにくい位置に所在しているが、他の竪穴住居跡のプランが検出できなかったので、帰属する本来の遺構が問題となろうがここにまとめて紹介する。



第10図 S1-1 実測図・出土遺物

本遺構の区画より南西側の外側1mほどのところに炉1が所在し、形状は0.7m×0.6mの楕円形状で、掘り込みは約0.1mと浅い。覆土は焼土粒を含み一部炭化粒を含んでいる。想定プランの東側に残りの2基は所在し、北側のものを炉2、南側を炉3とした。炉2は0.55m×0.4mの楕円形で、掘り込みはやはり浅く0.1mほど、覆土は焼土を含み一部炭化粒を含んでいる。炉2からは3・4の燃糸文の胴部小破片が出土している。その南側の炉3は、北に浅い小ピットが重なり、形状は0.7m×0.55mの楕円形で、深さは0.1mと浅い。覆土は焼土粒を少し含んでいる。3基の炉中からは明瞭な遺物は出土していない。3基の炉は共に想定している整穴住居跡の形状からは妥当とはいえない位置に所在し、本遺構の本来の炉とは認めがたい。

本遺構の上面の包含層の部分には後に記す、礫群2が存在し遺跡中では最大の焼礫の出土を見ており、本来は焼礫群とそれに伴う焼土遺構(炉)としての位置づけの方が妥当と考えられる。礫群2は焼礫が主として出土し、縄文土器の出土はきわめて少なく、上記の認識がより妥当という状況である。



第11図 SK-1 実測図

1～4は出土土器で、共に燃糸文の胴部小破片である。細い燃糸がほぼ縦方向に1はやや粗く、2は細かく施されている。3・4は伊2出土の縄文土器で燃糸文が施されている。4は丸底尖底の底部にやや近い部分の破片であろう。

(2) 陥穴

SK-1 (調査時 206-033 (3) SK-001) (第11図)

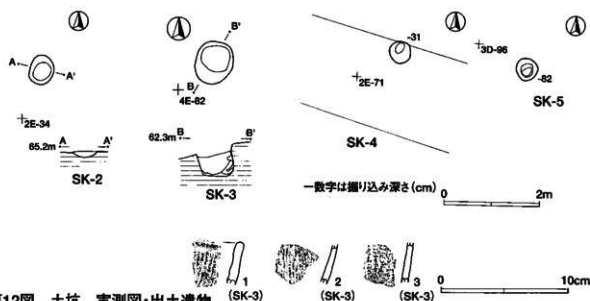
いわゆるTビットで、本遺跡では1基しか検出されなかった。形状は楕円形で長軸はほぼ南北方向に向いている。長軸長は2.1m、直交する短軸長は1.4m、掘り込みの深さは2.35mである。底部は長軸長約0.5m、短軸長0.4mで細くすぼまるようにV字型断面に掘り込まれている。覆土は上半部は黒色土を中心とした土で、中間以下にローム土を主としたしまった土が見られた。遺物は燃糸文の土器破片を少量出土したが、図示できる程ではなかった。

(3) 土坑

土坑を取り上げるが、形状が比較的小規模でビットといった方がよいかも知れないが、ここに土坑として取り上げる。遺物が出土しているのはSK-3のみで、時期の決定できないものもあるがここでは縄文時代の土坑として取り上げる。

SK-2 (調査時 206-033 (2) SK-002) (第12図)

2E-24グリッドに位置する小土坑で、0.6m×0.5mの楕円形の形状である。深さは約0.1mと浅く、皿状に掘り込まれている。遺物は出土しなかった。



第12図 土坑 実測図・出土遺物

SK-3 (調査時 206-033 SK-001) (第12図)

4E-72グリッドに位置する土坑で、0.9m×0.8mの楕円形の形状を示す。掘り込みは垂直に近く掘り込まれ、深さは最大で0.7mである。覆土中から燃糸文の土器片が3点出土している。1は口縁の破片でごくわずかに外反する口唇の直下からほぼ垂直方向に6条の燃糸文が見える。2・3は胴部の破片で2には細かい燃糸文が、3にはやや太く粗い燃糸文が認められる。

SK-4 (調査時 206-033 (2) SH-001) (第12図)

2E-61グリッドに位置する土坑で、調査区トレンチの北側壁に接して検出された。規模は0.5m×0.4mの円形に近く、深さは0.3mである。遺物は何も検出されなかった。

SK-5 (調査時 206-033 (2) SH-002) (第12図)

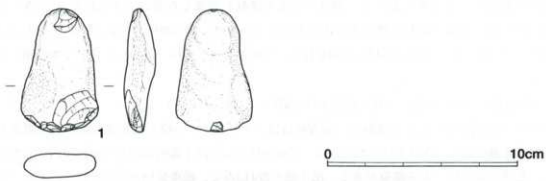
3D-96グリッドに位置する土坑で、形状は直径約0.5mのほぼ円形で、深さは最大0.8mとやや深めである。遺物は何も出土しなかった。

(4) 礫(焼礫)群

ここに焼礫群のブロックを取り上げる。調査区内から全面にわたって礫が検出されているが、それらの中でも特に出土の密度の高い部分が数か所認められ、その部分を礫群(平成15年度はSX-1とSX-2)として調査区を拡張し、精査を実施した。調査の方法も礫群と認識した部分(平成15年度のSX-1とSX-2を除いて)は、位置を記録し礫の取り上げを行っているが、他の地区は一括してグリッドごとに取り上げを行っている。礫群ごとに石材の分類を行い、焼成の有無、破片(破損)・完形(無破損)の別を集成した。

礫群1 (調査時 206-033 (2) 3T (礫群1)) (第13・14図、第3表)

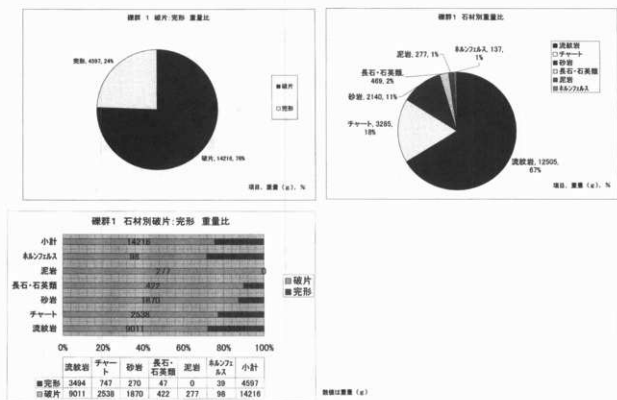
3E-20グリッド周辺を中心とする礫群で、調査時には3トレンチから礫が検出され拡張して調査を実施したので3T出土遺物として取り上げられている。遺物を検出した出土範囲は南北3m、東西2m程の範囲に収まり、北側に特に集中する部分がある。出土総点数443点で、総重量18.813kgを測り、すべての石が被熱していた。破片が大半で378点、14.216kg、完形の礫が65点、4.597kgとなる。石材別の構成比では



第13図 礫群1 出土状況・出土石器

発掘番号	遺構・グリッド	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第13図1	礎群1(3T)	1	敲石	64.0	40.0	15.0	53.53	凝灰岩		II~III	縄文時代	

第3表 礎群1 出土石器計測表



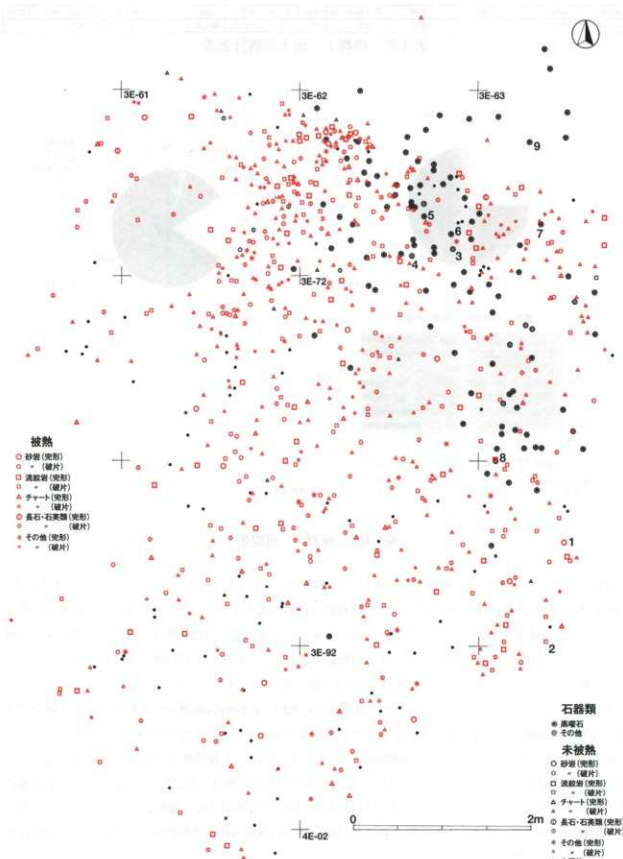
第14図 礎群1 組成表

流紋岩67%、チャート18%、砂岩11%、長石・石英類2%、泥岩1%、ホルンフェルス1%の順となる。遺跡全体の礫の石材別重量構成と比べると、流紋岩の占める比率がかなり高く逆にチャートの比率が低くなっている。選択的に流紋岩が集中しているといえよう。土器片も12点ほど出土しているが燃糸文の小破片で図示できる様なものはなかった。1は凝灰岩の敲石で、一括取り上げの礫の中から検出された。

礎群2 (調査時 206-033 (2) 礎群2) (第15図~第18図、第4・5表)

3E-62グリッド周辺から3E-92グリッド周辺までの範囲に比較的広範囲から遺物の出土した礎群である。遺物の検出範囲は南北8m、東西7m程の範囲に集中し、中でもやや北寄りに集中している。出土礫点数716点、15.977kg、ほとんどが被熱礫で672点、15.305kg、未被熱礫は44点、0.672kgと少なく4%程度である。破片がほとんどで585点、10.057kg、63%を占め、完形礫は131点、5.92kgである。石材別重量構成比では流紋岩38%、チャート29%、砂岩12%、長石・石英類9%、凝灰岩6%、頁岩4%、安山岩・泥岩・ホルンフェルスが1%程度である。遺跡全体の石材構成比に比較的近く、意図的な集中度は比較的低いといえよう。

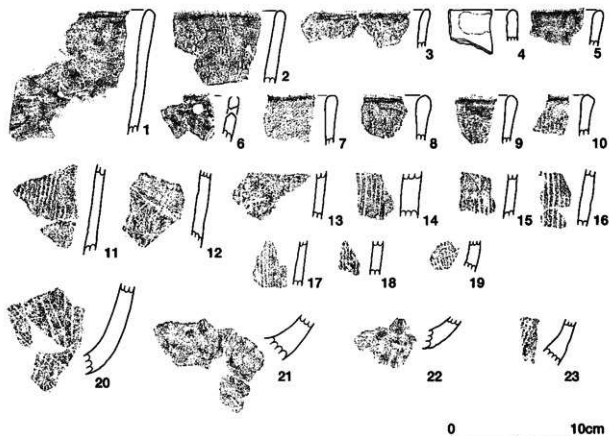
礎群の礫に混じり土器片が包含されており、比較的散布した状態で検出されている。燃糸文の土器片が主体で抜き出して図示した。



- 被熱**
- 砂岩 (完形)
 - - (破片)
 - 燧石類 (完形)
 - - (破片)
 - △ チャート (完形)
 - △ - (破片)
 - 黒石・石英類 (完形)
 - - (破片)
 - その他 (完形)
 - - (破片)

- 石器類**
- 燧石
 - その他
- 未被熱**
- 砂岩 (完形)
 - - (破片)
 - 燧石類 (完形)
 - - (破片)
 - △ チャート (完形)
 - △ - (破片)
 - 黒石・石英類 (完形)
 - - (破片)
 - その他 (完形)
 - - (破片)
 - 土器片

第15図 礫群2 出土状況

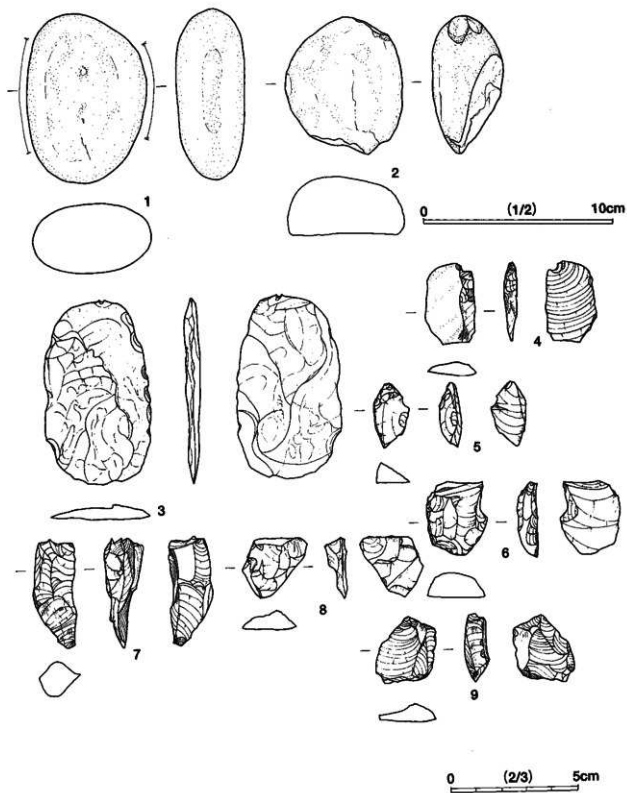


第16図 礫群2 出土土器

礫群に混じて黒曜石を中心とする剥片類が100点ほど出土しており、それらは3E-62グリッドから3E-83グリッドにかけての北西から南東に向けての方向に、礫群の集中部分を始点として南東方向へ流れる様に幅1.5m、長さ5m程度にわたって分布しており、加工された黒曜石を主とする剥片類の出土が窺われる。

出土土器類は、1～23すべてが撚糸文系の土器片である。1～10は口縁部の破片で1は無文、2～8は口唇部の無文部分の下から細めの撚糸が粗く縦方向に見られるもので、口唇部はわずかに外反するものが多い。6は口唇部近くに穿孔が見られ両側から穿孔されている。9・10はやや密に撚糸文が施されている。11～19は胴部の破片で文様の主体は撚糸文である。比較的細い撚糸で比較的密に施文されている。20～23は底部近くの破片で、緩い弧を描く丸底尖底の底部となるものと見られ、下方で器厚が厚くなっている。

出土土器類は1・2は礫器で1は砂岩の磨石、2は流紋岩の敲石、3は安山岩の剥片、4・5はチャートの剥片である。6は黒曜石のエンドスクレーパーで縦長の剥片を折断して端部をプランティングしている。7・9は黒曜石の剥片、8は頁岩の剥片である。



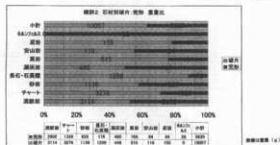
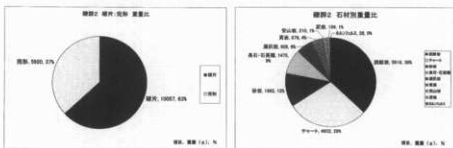
第17図 礫群2 出土石器

発掘番号	遺構・グリッド	遺物番号	種類	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第15-17図1	雑群2	574	磨石	90.0	62.0	36.0	297.47	砂岩		Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	被蝕
第15-17図2	雑群2	32	磨石	73.0	52.0	35.0	188.23	流紋岩		Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	被蝕
第15-17図3	3 E-62 (雑群2)	8	磨片	71.5	40.0	4.8	19.47	安山岩	安山岩	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15-17図4	3 E-62 (雑群2)	1	磨片	31.2	19.6	4.5	3.02	チャート	チャート1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15-17図5	3 E-62 (雑群2)	8	磨片	28.8	14.0	8.6	2.43	チャート	チャート2	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15-17図6	3 E-62 (雑群2)	47	エンドスケーパー	28.1	22.7	7.6	6.05	黒曜石	黒曜石5	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15-17図7	3 E-63 (雑群2)	6	磨片	41.9	15.8	13.6	7.75	黒曜石	黒曜石2	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15-17図8	3 E-63 (雑群2)	1	磨片	28.1	20.3	8.6	3.17	頁岩	頁岩1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15-17図9	3 E-63 (雑群2)	15	磨片	24.4	22.0	8.0	4.28	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-53 (雑群2)	1	磨片	12.2	17.9	2.3	0.40	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-53 (雑群2)	2	磨片	12.5	13.7	2.3	0.32	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-61 (雑群2)	1	磨片	24.4	15.3	2.2	0.88	黒曜石	黒曜石2	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	2	磨片	14.3	7.9	1.3	0.10	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	3	磨片	10.1	10.8	1.4	0.15	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	4	磨片	7.4	4.8	0.7	0.02	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	9	磨片	10.4	4.0	2.4	0.08	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	10	磨片	20.2	13.0	4.0	0.80	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	11	磨片	11.1	11.2	2.8	0.28	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	12	磨片	9.9	13.5	4.9	0.46	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	13	磨片	11.2	7.8	1.6	0.10	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	14	磨片	11.9	4.5	0.6	0.03	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	15	磨片	13.4	9.2	1.7	0.18	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	17	磨片	5.3	9.4	0.9	0.03	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	18	磨片	6.1	4.0	0.4	0.01	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	19	磨片	5.4	5.1	1.7	0.04	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	地点不明
第15図	3 E-62 (雑群2)	20	磨片	8.5	8.8	2.1	0.09	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	22	磨片	8.3	10.2	1.2	0.09	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	23	磨片	6.8	4.8	0.8	0.02	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	24	磨片	9.7	6.8	0.8	0.06	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	25	磨片	8.8	9.0	1.2	0.06	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	26	磨片	19.7	6.3	7.1	0.68	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	27	磨片	11.2	4.9	3.1	0.16	黒曜石	黒曜石2	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	28	磨片	8.3	7.4	2.3	0.12	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	29	磨片	3.7	4.6	0.8	0.01	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	30	磨片	6.3	6.0	0.6	0.01	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	31	磨片	8.3	4.9	0.3	0.02	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	32	磨片	16.9	9.4	2.8	0.33	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	33	磨片	18.4	11.6	2.6	0.53	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	35	磨片	25.2	19.2	5.9	2.28	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	36	磨片	9.4	4.9	1.1	0.04	黒曜石	黒曜石2	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	37	磨片	18.9	8.2	3.5	0.43	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	38	磨片	11.5	4.7	2.4	0.19	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	39	磨片	9.5	5.0	0.1	0.04	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	40	磨片	12.8	15.0	2.3	0.29	黒曜石	黒曜石2	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	41	磨片	15.3	8.8	0.8	0.22	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	42	磨片	6.5	6.6	0.9	0.04	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	43	磨片	4.5	7.1	0.6	0.02	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	44	磨片	6.4	6.0	0.4	0.02	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	45	磨片	6.3	11.0	2.2	0.10	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	46	磨片	6.6	7.1	1.1	0.05	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	48	磨片	3.7	4.3	0.5	0.01	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	49	磨片	8.0	8.0	1.2	0.07	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	50	磨片	5.3	3.7	0.9	0.02	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	51	磨片	6.4	7.0	1.0	0.03	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	52	磨片	11.5	8.3	1.0	0.08	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-62 (雑群2)	53	磨片	6.5	4.3	0.5	0.01	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-63 (雑群2)	1	磨片	16.8	12.6	2.6	0.42	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-63 (雑群2)	2	磨片	7.5	3.4	5.2	1.24	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-63 (雑群2)	9	磨片	9.0	7.0	0.9	0.06	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-63 (雑群2)	10	磨片	14.9	9.3	2.2	0.27	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-63 (雑群2)	11	磨片	11.9	9.8	1.6	0.18	黒曜石	黒曜石1	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-63 (雑群2)	14	磨片	8.6	7.1	1.0	0.05	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-63 (雑群2)	16	磨片	7.2	5.3	0.5	0.02	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-72 (雑群2)	3	磨片	17.1	13.4	5.5	1.21	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-72 (雑群2)	3	磨片	23.6	12.8	8.9	1.83	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-72 (雑群2)	3	磨片	13.1	11.3	4.6	0.69	黒曜石	黒曜石3	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	
第15図	3 E-72 (雑群2)	6	磨片	9.9	4.1	0.8	0.03	黒曜石	黒曜石4	Ⅱ～Ⅲ	縄文時代	

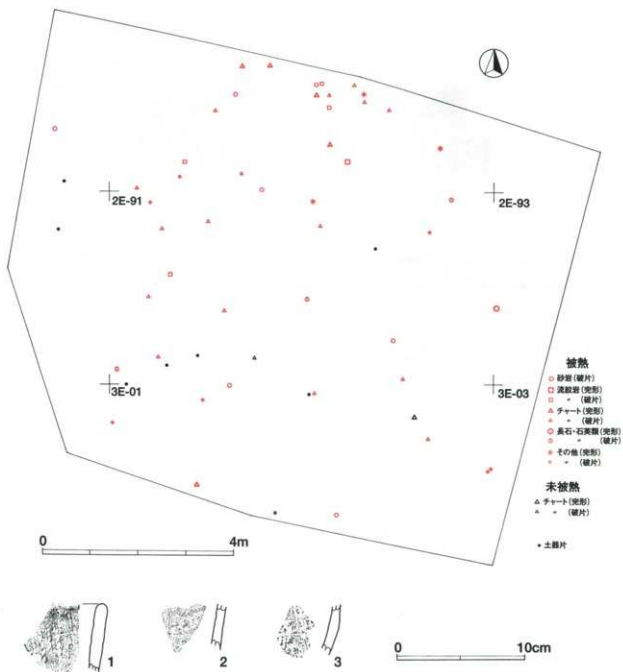
第4表 雑群2 出土石器計測表(1)

検出番号	遺構・グリッド	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第15区	3E-72(検群2)	7	剥片	9.1	4.7	0.9	0.04	黒曜石	黒曜石2	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	8	剥片	7.5	9.5	1.7	0.10	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	9	剥片	10.4	18.9	1.6	0.29	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	10	剥片	19.7	13.4	9.8	2.16	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	13	剥片	21.0	8.2	2.3	0.27	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	14	剥片	9.0	5.5	1.9	0.08	黒曜石	黒曜石2	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	15	剥片	18.0	10.5	6.0	1.05	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	16	剥片	14.6	6.8	5.5	0.53	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	17	剥片	12.0	5.5	1.5	0.07	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-72(検群2)	19	剥片	5.5	2.6	0.6	0.01	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	1	剥片	18.3	7.3	2.5	0.34	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	2	剥片	18.0	15.7	2.4	0.37	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	3	剥片	21.0	7.1	3.7	0.50	チャート	チャート2	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	5	剥片	18.5	11.3	3.2	0.70	チャート	チャート2	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	10	剥片	22.4	12.5	4.6	1.02	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	11	剥片	7.1	8.9	1.6	0.14	チャート	チャート1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	12	剥片	11.8	8.2	1.0	0.12	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	13	剥片	9.8	8.9	1.1	0.07	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	14	剥片	8.5	4.2	3.4	0.10	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	15	剥片	7.3	7.6	1.5	0.08	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	16	剥片	18.6	13.5	3.4	0.81	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	17	剥片	17.4	14.0	4.0	0.59	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	18	剥片	2.5	1.3	3.1	0.31	安山岩	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	19	剥片	9.0	6.1	1.7	0.07	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	19	剥片	8.0	7.0	1.4	0.06	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	19	剥片	20.5	17.3	7.5	2.22	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	21	剥片	11.0	7.0	1.7	0.14	黒曜石	黒曜石2	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	22	剥片	9.8	10.5	2.3	0.21	チャート	チャート3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	23	剥片	12.5	14.7	4.7	0.63	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	24	剥片	12.9	4.9	2.8	0.18	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	25	剥片	7.6	13.4	2.0	0.14	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	26	剥片	9.9	4.4	1.4	0.04	黒曜石	黒曜石2	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	29	剥片	10.6	15.8	2.4	0.37	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	31	剥片	22.4	10.0	3.8	0.67	チャート	チャート4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	34	剥片	12.5	13.4	3.6	0.34	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	35	剥片	6.6	6.1	0.7	0.03	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	36	剥片	15.5	6.7	1.2	0.10	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	38	剥片	12.5	8.5	1.7	0.13	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-73(検群2)	39	剥片	17.3	11.6	4.9	1.20	黒曜石	黒曜石5	II~III	縄文時代	
第15区	3E-82(検群2)	1	剥片	13.3	3.9	2.3	0.21	黒曜石	黒曜石4	II~III	縄文時代	
第15区	3E-83(検群2)	2	剥片	13.8	21.8	2.4	0.57	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-83(検群2)	3	剥片	7.8	8.5	1.3	0.06	黒曜石	黒曜石3	II~III	縄文時代	
第15区	3E-83(検群2)	4	剥片	19.9	12.9	8.1	1.80	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	
第15区	3E-83(検群2)	5	剥片	16.1	14.7	1.9	0.60	黒曜石	黒曜石1	II~III	縄文時代	

第5表 礫群2 出土石器計測表(2)



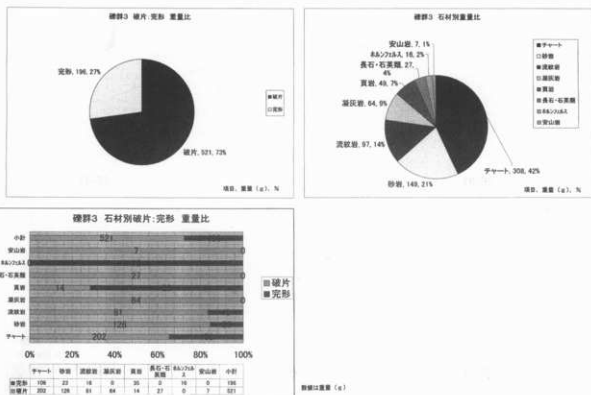
第18図 礫群2 組成表



第19図 礫群3 出土状況・出土遺物

礫群3 (調査時 206-033 (2) 礫群3) (第19・20図)

今回の調査で取り上げた礫群としては最も小さい礫群で、2E-91グリッド周辺に位置する。礫群の出土範囲は南北4m、東西5mほどで集中度も低い。出土点数54点、0.717kgで1kgにも満たない。未被熱のものが4点、28g、被熱が50点、689g、破片が43点、521g、完形が11点、196gである。構成石材別重量比は、チャートが25点で42%、砂岩が9点で21%、流紋岩が5点で14%、凝灰岩が5点で9%、頁岩が5点で7%、長石・石英類が3点で4%、ホルンフェルスが1点で2%、安山岩が1点で1%と遺跡全体の石材別構成重量比から見ると、チャートの比率がかなり高い特異的な礫群であるが、全重量が非常に少なく量的にはたいしたことはない。



第20図 礫群3 組成表

礫群に混じて土器が少量検出されている。1～3は燃糸文の土器である。1は口縁部で粗い燃糸文が施文されている。

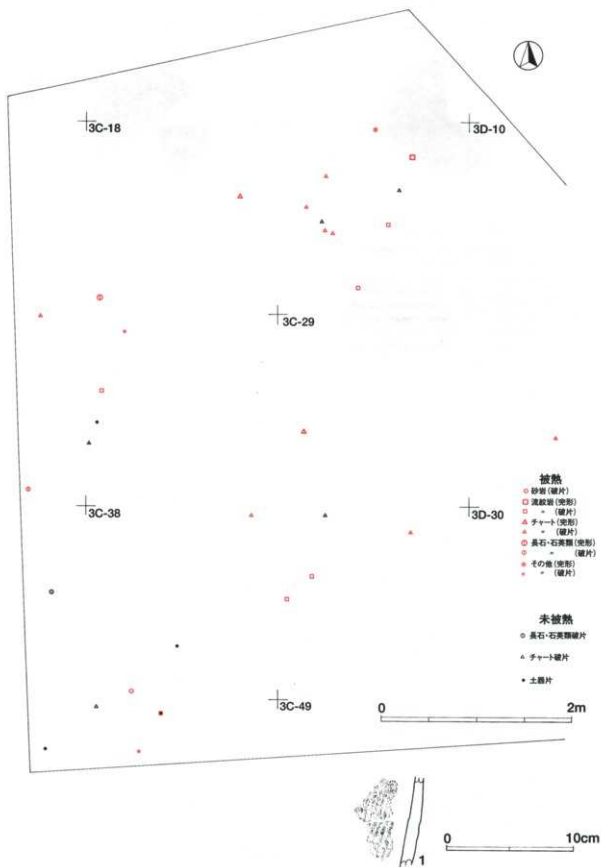
礫群4 (調査時 206-033 (2) 礫群4) (第21図)

3C-18グリッド周辺を中心にまとまりの弱い礫群である。出土点数66点、2,559kgで未被熱が14点で0.31kg、被熱が52点、2,249kg、破片が51点、1,669kg、完形が15点、0.89kgである。全体量は少なく、石材別構成重量比を見るとチャートが32点、36%、凝灰岩が5点、22%、流紋岩が13点、17%、頁岩が7点、11%、長石・石英類が5点、9%、砂岩が3点、4%、泥岩が1点、1%となる。流紋岩の割合が低く、チャートの比率が高いが全体量が少なく、出土の集中度も低いのであまり人為的な集積としては判断しにくい。

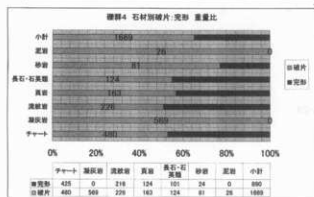
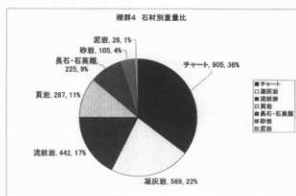
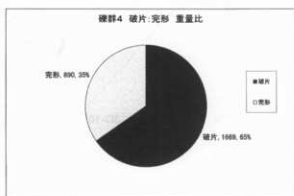
礫に混じて土器片が出土しており、1は燃糸文の土器片である。

礫群5 (調査時 206-033 SX-1) (第23・24図、第6表)

先述の礫群とは異なり、調査時にすべての礫の位置を記録せずに、平面的な出土範囲を記録してグリッドごとに取り上げを行った礫群である。以下の礫群6も同様な方法で調査を実施している。3B-46グリッド周辺から出土した礫群で、出土の範囲は南北13m、東西11m程の広い範囲から出土している。出土量も多く1,429点で52,534kgを測り、すべてが被熱礫であった。破片は1,160点、37,091kg、完形礫は269点、15,443kgであった。比較的広い範囲での出土で、グリッドでは3B-36・37・45・46・47・48・55・56・57・58・65・66・67・68・76・77の16グリッドに及び、出土の中心は3B-46・56・67グリッド周辺から



第21図 礫群4 出土状況・出土遺物



第22図 礫群4 組成表

の出土が多い。石材別構成重量比は、流紋岩が一番多く523点、23.088kg、次にチャートが687点で、21.281kgと両者で多数の85%を占め、後に砂岩129点、10%、長石・石英類70点、4%と急にその数を減じる。ホルンフェルスは1%、16点、凝灰岩は2点、泥岩も2点でそれぞれ1%にも満たない。遺跡全体の構成比に近い。

礫群に混じって周辺も含めると黒曜石の剥片が3点(1・2・4)、敲石(3)が1点出土している。

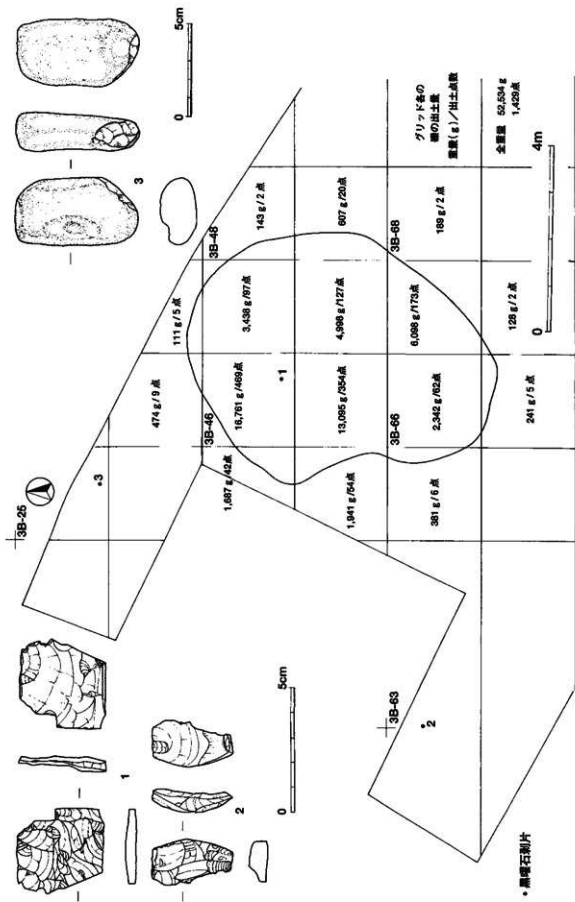
礫群6 (調査時 206-033 SX-2) (第25・26図、第7表)

5F-47グリッド周辺を中心に出土した礫群で、全302点、10.279kgを測る。すべて被熱礫で、破片219点、6.714kg、完形83点、3.565kgである。石材別重量構成比は流紋岩124点、46%、チャート149点、42%の両者でそのほとんどを占め、砂岩19点、8%、ホルンフェルス4点、1%、長石・石英類2点、1%、凝灰岩1点、1%、泥岩2点、1%、頁岩は1点で1%にも満たない。この構成比も礫群5と同様に遺跡全体の構成比に近い。

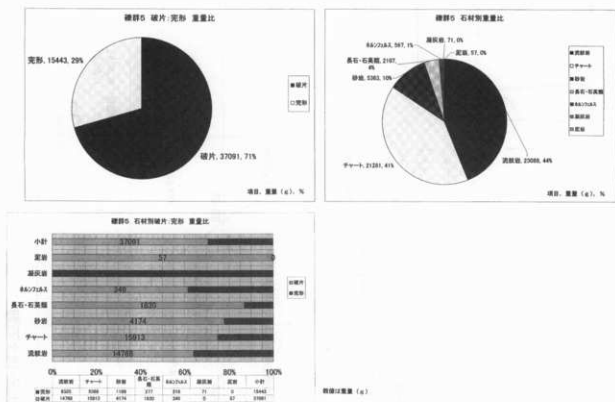
礫群に混じって黒曜石の石核(1)、剥片が出土している。

その他の出土礫 (調査時 206-033 206-033 (2) 206-033 (3))

遺跡全体で礫が検出されている。礫群1から礫群6までに取り上げなかったものを分類し集計した。点数は3,055点で97.357kgを測り、未被熱礫は2点、41g、被熱礫は3,053点で97.316kgとなる。破片は2,350点で66.806kg、完形は705点で30.551kgとなる。石材別重量構成比は流紋岩950点で39%、チャート1,403点で14%、砂岩が391点で5%、長石・石英類170点で2%、凝灰岩51点で1%、頁岩37点、ホルンフェルス23点、泥岩15点、安山岩15点で各1%程度である。



第23図 薬群5 出土状況・出土石器



第24図 礫群5 組成表

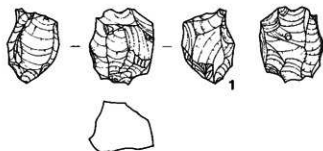
検出番号	遺構・グリッド	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第23図 1	3日-46 (礫群5)	2	剥片	34.6	29.9	5.3	6.59	黒曜石	黒曜石6	II~III	縄文時代	
第23図 2	3日-63 (礫群5)	1	剥片	31.3	19.1	7.4	3.96	黒曜石	黒曜石6	II~III	縄文時代	
第23図 3	3日-25 (礫群5)	1	敲石	64.3	36.8	19.5	71.67	砂岩		II~III	縄文時代	
第23図	3日-46 (礫群5)	2	剥片	33.7	13.0	8.0	2.86	黒曜石	黒曜石2	II~III	縄文時代	

第6表 礫群5 出土石器計測表

(5) その他の出土遺物

縄文土器 (第28・29図)

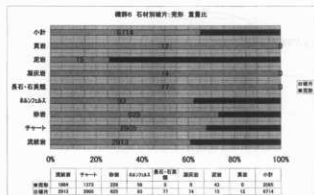
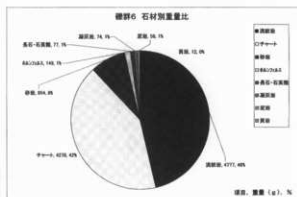
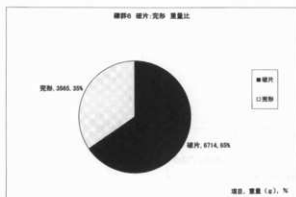
縄文期以外の遺構覆土から出土したり、グリッドの包含層から出土した縄文土器類を集めここに掲載する。1~80までは燃糸文系の土器、81は後期の沈線の入った土器、82・83は後期の縄文の入った土器片と見られる。1から23は口縁部の破片である。断面形状で見ると、口縁はほぼ直線的に延びるものが多く、一部に緩く外反するもの(17・18・19)や口唇部近くで外側に肥厚するもの(3)なども認められる。一方口縁部には穿孔の見られるものもある(4・18)。文様についてはほとんどが燃糸文が認められ、12・14のみ文様が確認できない。それ以外は燃糸文のやや粗い間隔のもの(1・2・5~8)、それと比べると細かい間隔で施文されたもの(3・4・9・10・16~20)などに分けられる。20・21は器厚が薄く器形も小振りなものと思われる。24~80は胴部及び底部の破片である。底部は丸底尖底のため底部に近い破片はあるが(76~80)明瞭な底の頂点部分はなかった。燃糸の施文は口縁部と同様に密な間隔の燃糸のもの(24~30など)とやや粗い間隔で施されるもの(33~35など)とに分けられる。



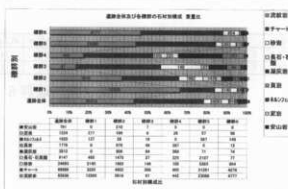
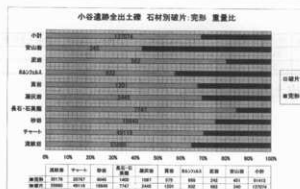
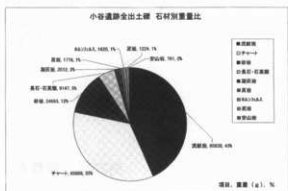
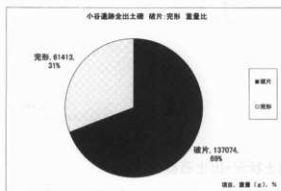
第25図 礫群6 出土状況・出土石器

発掘番号	遺構・グリッド	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第25図1	5F-47 (礫群6)	1	石核	29.0	24.3	20.8	14.81	黒曜石	黒曜石8	II~III	縄文時代	
第25図	5F-56 (礫群6)	2	剥片	23.7	17.8	3.6	1.31	黒曜石	黒曜石2	II~III	縄文時代	

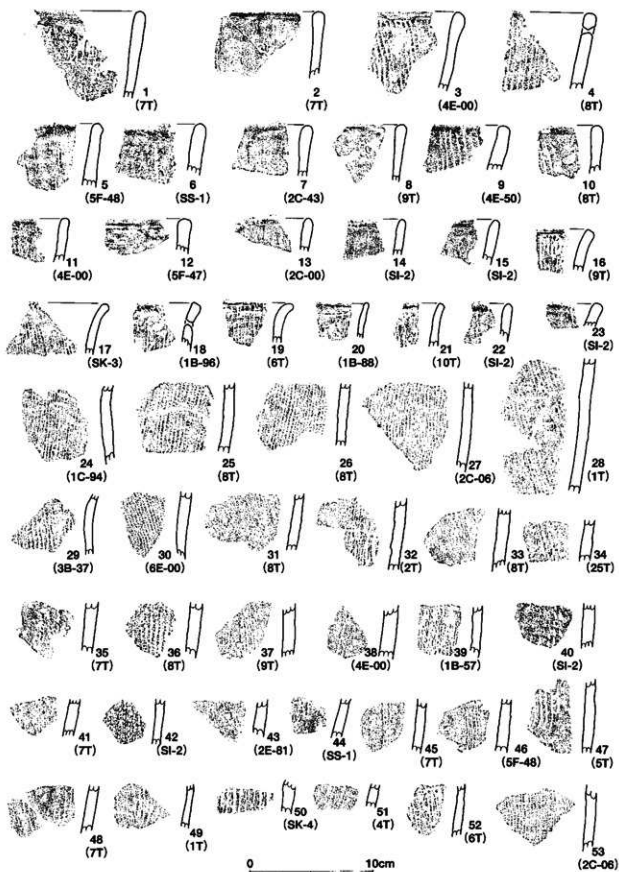
第7表 礫群6 出土石器計測表



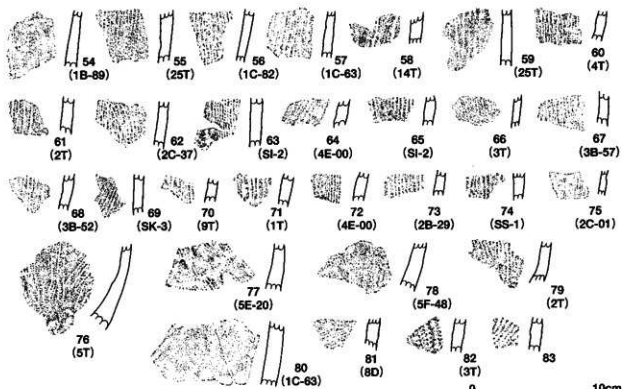
第26図 群群6 組成表



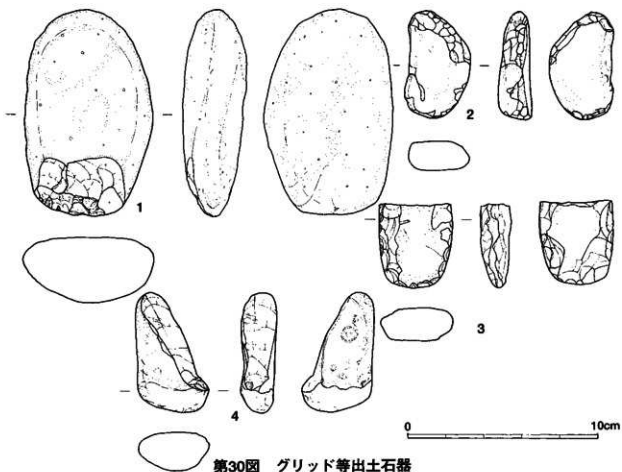
第27図 小谷遺跡全出土礫 組成表



第28図 グリッド等出土縄文土器(1)



第29図 グリッド等出土縄文土器(2)



第30図 グリッド等出土石器

発掘番号	遺構・グリッド	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	石材	母岩	出土層位	文化層	備考・その他
第30図1	4F-46	1	敲石	108.0	68.0	32.0	334.35	流紋岩		II-III	縄文時代	焼熟
第30図2	8T	2	敲石	56.0	34.0	18.0	45.58	砂岩		II-III	縄文時代	焼熟
第30図3	4F-46	1	打製石斧	43.0	38.0	16.0	42.49	砂岩		II-III	縄文時代	焼熟
第30図4	8T	2	敲石	64.0	37.0	18.0	46.76	安山岩		II-III	縄文時代	焼熟

第8表 グリッド等出土石器計測表

グリッド等出土石器（第30図、第8表）

礫器を主とした、グリッド等からの出土石器を取り上げる。1・2は敲石で1は流紋岩製、2は砂岩製である。3は砂岩の打製石斧で、刃部を残し上半は途中で折損している。4は安山岩の敲石で大きく破損している。

3 古墳時代～奈良時代

(1) 竪穴住居跡

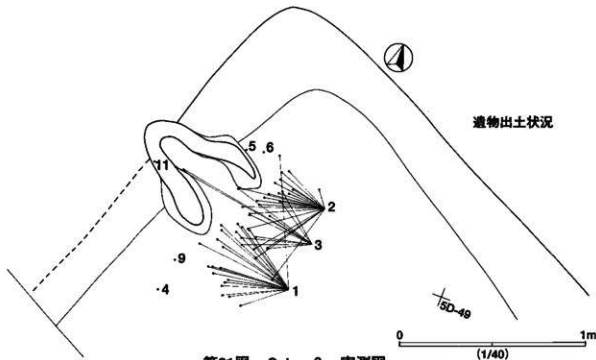
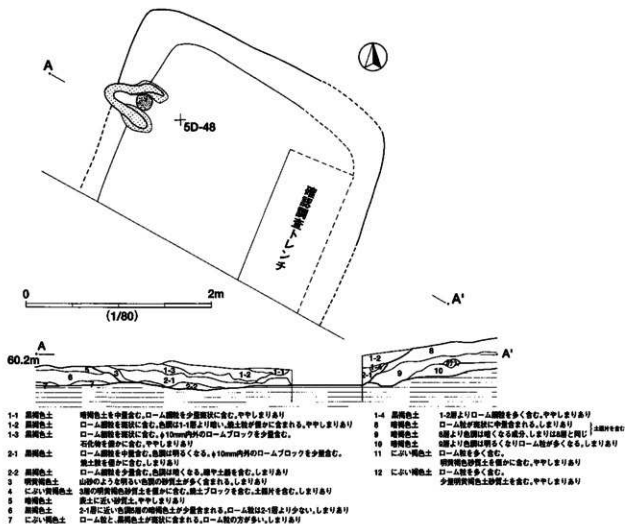
SI-2（調査時 206-033 SI-1）（第31・32図）

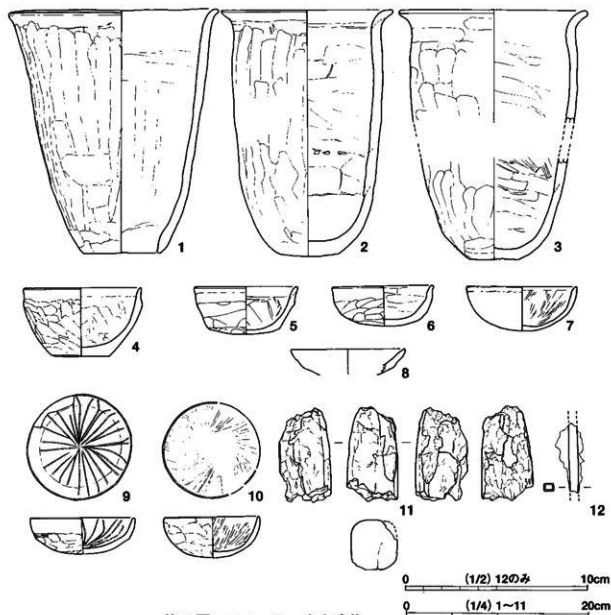
5D-48グリッドを中心とする竪穴住居跡である。遺構の所在する周辺は北東から南西に向かって地山が傾斜して谷に向かう台地の縁辺部に近い部分で、本遺構の調査できた部分は北東側の約2/3程度である。南西側は調査区の境界が迫り調査対象地外となるため調査できなかった。南東側の部分は確認調査の際に壁と一部の床を掘り抜いてしまったので遺存していない。

本遺構はカマドを持つ竪穴住居跡でカマドを通る主軸方向は北西から南東方向に向いている。一部掘り抜いているため推定を含むが主軸長は掘り込み上端で約6.0m、床面では推定5.0m程になる。直交する軸方向は現存長は掘り込み上端で4.5m、床面で約4mである。掘り込みはやや緩やかで上端と床面では0.4m～0.6m程内側へ入り込んでしまっている。これは本来の掘り込みがなだらかだったというよりは、傾斜地のために廃絶及び埋没時に周囲の地山が雨水や流水によって、自然崩落や流入したりして壁が崩れていったものと思われる。掘り込みの深さは北東側で約0.9m、南西側の調査境界付近で0.5m程である。

床面はほぼ平坦で、精査の結果、柱穴、ピット・壁溝などは検出されなかった。カマドが北西辺の途中に1基存在している。カマドは山砂によって構築され、両袖が遺存し火床部は炭化材・焼土が混じり焼けていた。火床部のやや奥に一部破損しているが形の整った土製の支脚が出土している。煙道部は明瞭に焼けた傾斜の部分がある。遺物はカマド前面の周辺にややまとまって出土し、長胴の甕2点、甌1点、坏4点はカマドの袖の外側から検出されている。覆土中からは坏や釘状の鉄製品の破片などが出土している。

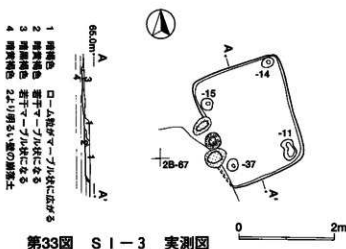
遺物は遺構全体を調査できなかったことも影響するのか、あまり多くない。1は土師器の甌である。口径は22.6cm、器高は26.5cmを測る。色調は橙褐色、胎土は砂粒を含む。口縁を横ナデし、胴部は縦方向のヘラケズリ、底部近くは横方向のヘラケズリがなされている。2・3は長胴の土師器の甕で、3は底部と上半部が接合しないが形状から同一個体と判断した。2は口径18.6cm、底径6.5cm、器高26.6cmを測る。器壁がやや厚めで仕上げが粗く、外反する口縁は横ナデがなされ、胴部は縦方向のヘラケズリ、底部近くに至ると横方向のヘラケズリがなされる。胴部中央付近は仕上げが粗く輪積み痕が残っている。3は2に似た長胴の甕と見られ、口径20cm、底径5.4cm、仕上げがやや粗く胴部中央付近には輪積み痕が残っている。4は明瞭な底部を持つ坏で底径6.4cm、口径12.7cm、器高7.5cmを測る。口唇部は緩やかに外反しつまみ上げられ、体部はヘラケズリが斜方向に細かく施されている。底部はヘラケズリで平滑である。5～7、





第32図 S1-2 出土遺物

9・10は土師器の坏である。5は完形で、口径11.2cm、器高は5.2cm、底部は平坦でなく緩やかな弧状にヘラケズリされている。底径は7.9cmを測る。口唇部は横ナデ、外面はヘラケズリがされている。6は口径10.8cm、器高4.4cm、底部は境界が不明瞭な丸底である。口唇部は横ナデがなされ、体部は横のヘラケズリがされている。7は口径11.8cm、器高4.8cmを測る丸底の坏である。内面は底部中央を中心として放射状に暗文状にヘラケズリが強く施されている。8は土師器の浅い皿状の破片で、復原口径12.6cmとなる。外面は途中に段を持ち、内外面共に横ナデがされ色調は橙褐色である。9・10は内面に暗文のある土師器の坏である。9は口径11.2cm、器高4.1cmの丸底のほぼ完形である。内面にはナデの後に、中央から放射状にほぼ等間隔に26本の暗文が刻まれている。外面は口縁は横ナデ、底部はヘラケズリがされている。10も内面に暗文が施されている。やや螺旋状に反時計回りに弱い暗文が、底部は弱く口縁に近い部分にはやや強く施される。口径10.2cm、器高4.4cmの丸底で、外面はほぼ全面にヘラケズリがされている。口唇部近くのみ横ナデがされている。11はカマドの火床部奥から出土した支脚で、焼けており一部破損している。現存



第33図 SI-3 実測図

長10.2cm、幅5.6cmで、断面は大きく角取りをした正方形状である。12は鉄製品で、細長い角棒状のものである。両端を折損し、現存長3.7cm、幅0.5cm×0.4cmの長方形断面である。やや錆膨れがある。

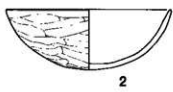
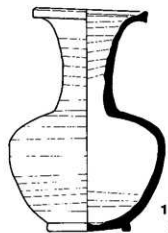
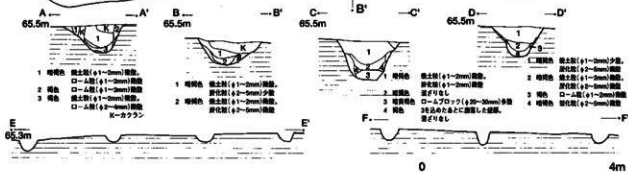
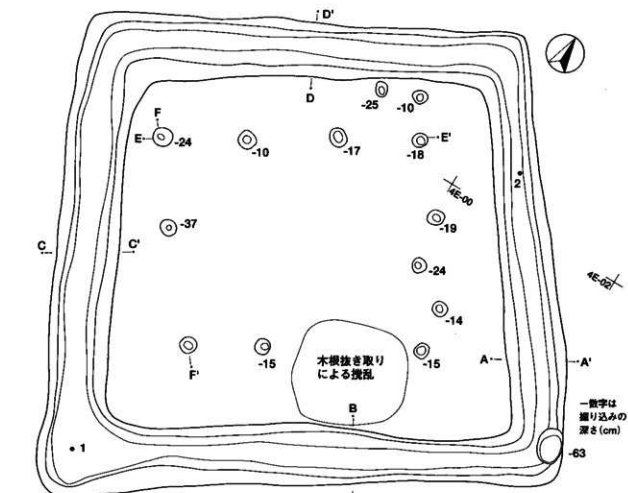
SI-3 (調査時 206-033 (2) SI-001) (第33図)

2B-57グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。カマドを持つ住居であるが規模が小さく、カマド位置と向く方向が通常のものとは異なり南西を向いている。形状は長方形で、掘り込みの遺存が悪く遺存するのは0.1m程度しかない。カマドの存在する辺が長軸となり、長さ2.4m、直交する短軸は長さ1.8m程である。掘り込みの遺存は浅く、床面にはカマド、ピットが見られる。ピットは平面形のほぼ四隅に近いところに所在し、直径は0.2m前後、南東部分のみ2個重複している。深さはあまり深くなく10cm前後を主とする。壁溝等はない。カマドは南西側の辺のほぼ中央に位置し、山砂で構築された袖と、その間に燃焼によって火床の焼けた部分がある。支脚等は検出されなかった。遺物はきわめて少なく図示できる様なものなかった。

(2) 方形周溝状遺構

SS-1 (調査時 206-033 (2) SD-001) (第34図)

4E-00グリッド周辺に位置する方形周溝状遺構である。一辺の長さが9m～11mのややゆがんだ正方形の形状の周溝が四辺をめぐる。四辺の内、北側の辺は最も短く約9.1m、東辺が9.5m、西辺が10.2m、南辺が11mと最も長い。北側寄りにややすばまる方形の形状をしている。各辺の中央付近の周溝の幅は、北辺で1.1m、東辺で1.1m、西辺で1.3m、南辺で1.35mとなり、各辺の中央付近の掘り込みの深さは、北辺が0.7m、東辺が0.6m、西辺が0.8m、南辺が0.5mである。溝の掘り込みは、逆台形状に掘り込まれ、覆土は焼土粒を少し含む暗褐色土が堆積している。周溝内側はピット以外には掘り込みは検出されず、埋葬主体部等の遺構は存在していない。内側には、浅く小さいピットが13基検出されている。直径はおおよそ0.3m、深さは0.2m前後のものが多く、一部直線方向に配置されたように見え、掘立柱建物跡の柱跡の様にも見える。掘立柱建物の柱穴とすると、形状がやや小振り掘り方も浅く、ここで想定している本遺構の時期である奈良・平安時代のものとはやや異なる様である。中近世の遺物の出土もほとんどないことから、ここでは積極的に中近世の掘立柱建物跡とすることはせずにその可能性を指摘するのに止める。一部



第34図 SS-1 実測図・出土遺物

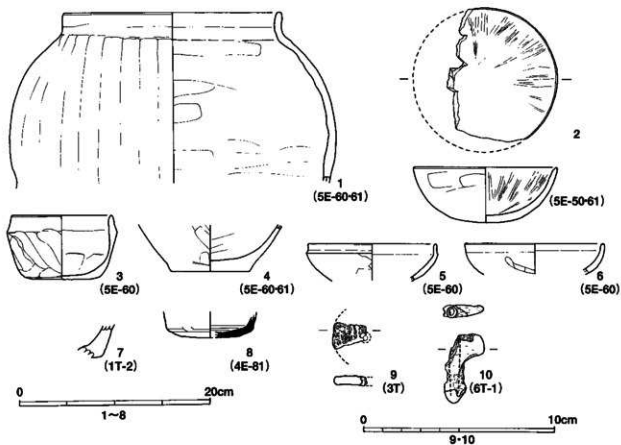
には木根の抜き取りによる攪乱があった。

周溝の南東角部分に周溝外壁を扶けるような位置に、長さ0.75m、幅0.55m、確認面からの深さは0.6m、周溝底からの深さは0.1mと浅くなるが、楕円形の土坑が1基検出されている。特に出土遺物はないが、周溝内埋葬の土坑と見られる。遺物は周溝内からは土器の破片類が出土している。その中では南西角の屈曲する部分が周溝の他の3つの角の部分より幅がやや広くなっており、その部分から1の長頸瓶が1点ほぼ完形の状態出土している。本遺構で最も南に位置する部分であり、周溝が広く掘り込まれていることや上記の須恵器の長頸瓶が出土していることから、何らの祭祀・行事の行われた部分であると考えられよう。また周溝東辺の中央よりやや北寄りに2の土師器の環が出土している。

1は須恵器の長頸瓶で接合によりほぼ完形となった。比較的小破片に破損しており、その割りには接合の状況が良好だったので、意図的に破砕してその場に散布する様な行為によるものかもしれない。器高は23.7cm、底径8.5cm、やや長い頸部からラッパ状に開く口縁部の口径は11.5cmを測る。胴部は中央より上に最大径を持ち16.3cm、頸部の長さは10.5cmで、頸部の内外面特に内面には強くクロロ目にあたる凹凸が認められる。胎土は灰色に黒色の小砂粒が目立つ様に混じる比較的緻密な胎土である。焼成は良好で灰色の色調に、胴部上面及び口縁部内面、頸部片側に濃黒緑色の自然釉がかかり、一部釉が流れそこに付着物がある。釉は底面にまで懸かりたまっている。底部は高台が削り出されており、高台の内側はやや削りが足らず中心が高台よりわずかに突出している。2は土師器の環である。接合して完形となり、口径は17.2cm、器高6.3cm、底部は丸底で、胎土は砂粒を含み、均質である。焼成は良く、色調は明るい橙褐色である。外面はヘラケズリ、内面はナデ、口唇部は更に丁寧にナデられている。

(3) グリッド出土の遺物 (第35図)

古墳時代～奈良時代に該当しない遺構及びグリッド出土の遺物を図示する。1は土師器の大型の甕である。遺存状態が悪く復原実測をしている。復原口径は22.8cm、現存高17.8cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる短い口唇部は、ナデがなされ、球形にふくらむ胴部上半は縦のヘラケズリがされている。胴部下半は存在しない。5E-60・61グリッド出土である。2は土師器の環で、口径14.8cm、器高は5.7cmを測る。底部は丸底でほぼ円弧を描いている。内面は中心に向かって放射状に暗文が描かれるがかなり不明瞭である。外面は摩滅が著しくケズリの整形痕が観察しづらい。5E-50・61グリッド出土である。3は土師器の碗で口唇部がやや内湾しナデがされている。口径は10.4cm、底径は7.8cm、器高は6.6cmを測る。外面はヘラケズリがされている。5E-60グリッド出土である。4は土師器の甕の底部で底径は8.2cmを測る。現存高は4.7cmで5E-60・61グリッド出土である。5・6は土師器の環で5は口径13.6cm、現存高3.7cmを測る。6は口径14.6cm、現存高3.1cmを測る。共に5E-60グリッド出土である。7は土師器甕の底部の小破片である。IT (033 (2)) 出土である。8は須恵器の壺か甕の底部破片で、底径9.0cm、現存高2.7cmを測る。4E-81グリッド出土である。9は土製品で燃糸文の早期の縄文土器片を加工した紡錘車の破片である。中心にあたる穿孔部は上下両側から穿孔がなされている。円形の外面は磨かれて平滑になり丸みを持っている。破損しており全周の1/8程度の遺存状況である。表面には地文の燃糸文が4条ほど観察される。10は鉄製品で丸釘状の鉄製品に木質部が多く付着しており、箱などの木製品に打ち込まれた釘と見られる。錆が多く鉄の状態をよく観察できないが断面が丸釘状で、遺存する木質から板の方向が窺われる。比較的新しいものかも知れない。



第35図 グリッド等出土遺物

4 その他

溝2条を取り上げるが出土遺物の状態から時期の決定がしにくく、調査部分も少ないことから、ここでは時期・用途不明の溝として扱う。

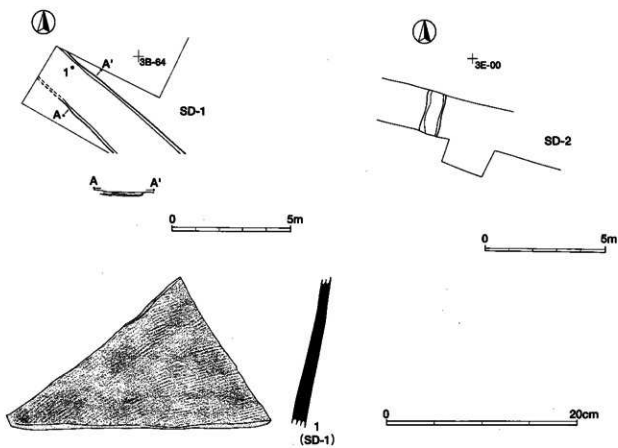
(1) 溝

SD-1 (調査時 206-033 SD-001) (第36図)

3B-64グリッド周辺に位置する溝である。確認調査のトレンチ内の調査のみで終わったので全容は不明である。検出した長さ約7m、幅1.8m、深さは0.1mほどしかなく浅い。地山の自然傾斜とはほぼ直角に走っている。遺物は図示した大型須恵器の破片が出土している。

SD-2 (調査時 206-033 (2) SD-002) (第36図)

3D-09グリッド周辺に位置する溝である。確認調査のトレンチで検出された分だけ調査を実施した。調査できたのは長さ1.8m、幅は0.7mほどで深さは0.1m程度の浅い溝である。遺物は少なく、図示できるようなものはなかった。



第36图 SD-1・SD-2 実測図・出土遺物

第3章 まとめ

1 旧石器時代

2か所のブロックが検出され、第1ブロックはⅣ層からⅥ層にかけての剥片3点のみの出土であった。第2ブロックは黒曜石を主としたⅣ層～Ⅴ層の文化層のものと、ややそれより深いⅥ層の文化層のものと2つの文化層に区分されそうである。しかしながら出土状況では2つの文化層に分けられそうであるが、出土遺物の母岩の肉眼による区分によると両者の遺物は、同じ母岩が起源とみられる剥片が、両層から検出され、出土状況から見られる2つの文化層への区分はどちらも無理が生じそうである。

2 縄文時代

検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、陥穴1基、土坑4基、礎群6か所である。出土遺物は、早期燃糸文の土器片、敲石、焼礫等である。遺構は竪穴住居跡が1軒検出されているが、遺構としての構成要素が弱く、掘り込みの遺存が悪く形状の確定ができなかった。また検出した炉の位置や状況が単独の住居のものとは思いがたく、複数の住居跡の存在によって構築されたものとの所見が調査者によって残されており、住居跡を1軒と限定するには無理がある。

出土した燃糸文の土器は、やや細めの燃り糸がほぼ縦方向にやや粗い間隔に施文されるものが多く、口唇部の断面はほぼ同じ厚さで直線的に延びて丸くなるものが多いが、僅かに肥厚して外反するものも見られる。

礎群は、集中して出土した部分が6か所あり、ほぼすべての礎が被熱していた。礎の出土総重量は6,065点198,487g(198kg487g)で、未被熱のものが1,051gと1%未満であった。破片の割合が高く、破片が137,074gで69%、完形が61,413gで31%となる。石材別の重量比は流紋岩が最も高く43%、次にチャートで35%、その両者で8割近くを占め、残りは砂岩が12%、長石・石英類が5%、凝灰岩が2%、それ以外の石材は1%程度かそれ以下である。(第27図に出土礎の組成表を掲載した。)

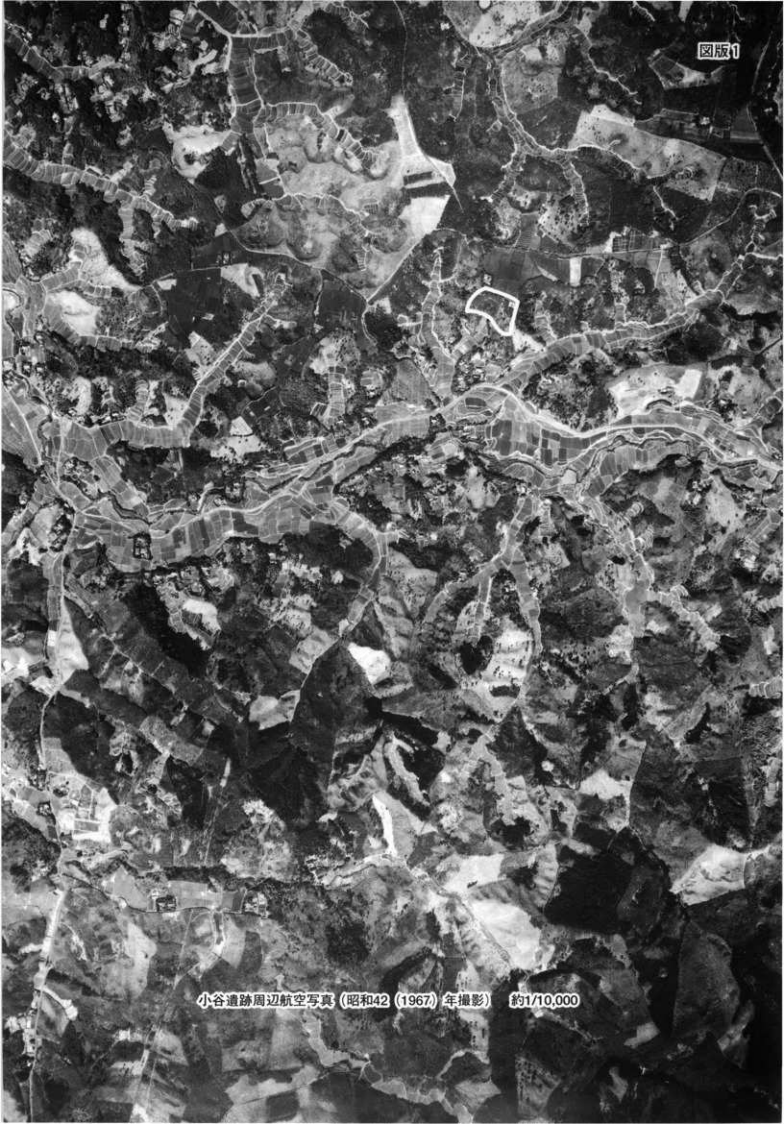
破片と完形礎との比率は石材によってやや異なり、安山岩は完形礎の比率が高く約60%近くあり、逆に長石・石英類は低く15%程度しかない。礎群ごとの石材の構成比を重量で集計したが、それによると礎群1は流紋岩の比率が高く、礎群3・礎群4は流紋岩は低く、チャートの比率が高い。礎の集積は何らかの人の手が加わったことによる結果としての集積であろうし、その礎群ごとに何らかの意図・目的を持って石材を集積しているようであるが、その意図や目的は明確にはできない。礎群2では黒曜石の剥片がまとまって分布しており、石器の製作や加工に類する行程が行われたことが窺われるが、詳細な分析ができなかった。

3 古墳時代～奈良時代

3次にわたる調査で検出された該期の遺構は、竪穴住居跡2軒、方形周溝状遺構1基であった。小谷遺跡全体の傾向としては古墳時代、奈良・平安時代の集落、墳墓遺構、寺院に関連する遺跡という位置付けがされており、特徴的なものをあげれば瓦塔・瓦堂と火葬墓群に代表される仏教関連の集約地として知られている。台地上の集落到付属する集落内寺院とその周辺の埋葬地という位置付けの中で、今回の調査区では竪穴住居跡が2軒、方形周溝状遺構1基のみという、遺構の密度が低く、大集落の中心地の様な遺構

の密度ではない。竪穴住居跡にしても台地上の散村集落の縁辺といった分布で、北東側に位置する大畑台遺跡や中台遺跡が生活遺跡としての中心地であり、その南西に位置し台地縁辺に近い小谷遺跡は、集落の中心ではなく縁辺部の埋葬や信仰としての聖地的な位置付けがなされていたと見られる。

写真図版



小谷遺跡周辺航空写真(昭和42(1967)年撮影) 約1/10,000



小谷遺跡周辺航空写真(平成18(2006)年撮影) 約1/10,000



調査前風景



調査前風景



第2ブロック遺物出土状況(南から)



3E-72グリッド遺物出土状況（東から）



3E-72グリッド調査状況（東から）



第1ブロック西側壁面土層断面



SI-1完掘 (北西から)



SK-1断面



SK-1全景



SK-3完掘



SK-2完掘 (南西から)



SI-1炉1断面 (北東から)

SI-1 炉 1 完掘 (北東から)



SI-1 炉 2 断面 (南西から)



SI-1 炉 2 完掘 (南西から)





SI-1炉3完掘（南西から）



SD-2完掘（南東から）



調査風景（平成18年度）

礫群 5 出土状況



SI-2遺物出土状況



SI-2カマド周辺遺物出土状況





SI-2全景



SI-2カマド煙道～袖・支脚

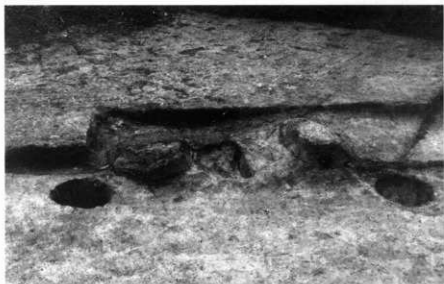


SI-3断面（西から）

SI-3発掘（東から）



SI-3カマド検出状況（東から）



SS-1断面B~B'（南西から）





SS-1断面A~A'



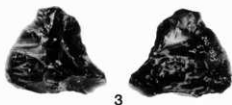
SS-1遺物出土状況 (東から)



SS-1完掘 (北西から)



第1ブロック出土石器



3



7



2

第2ブロック出土石器



礫群5 1



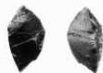
礫群2 9



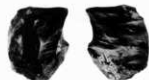
礫群2 8



礫群2 7



礫群2 5



礫群2 6

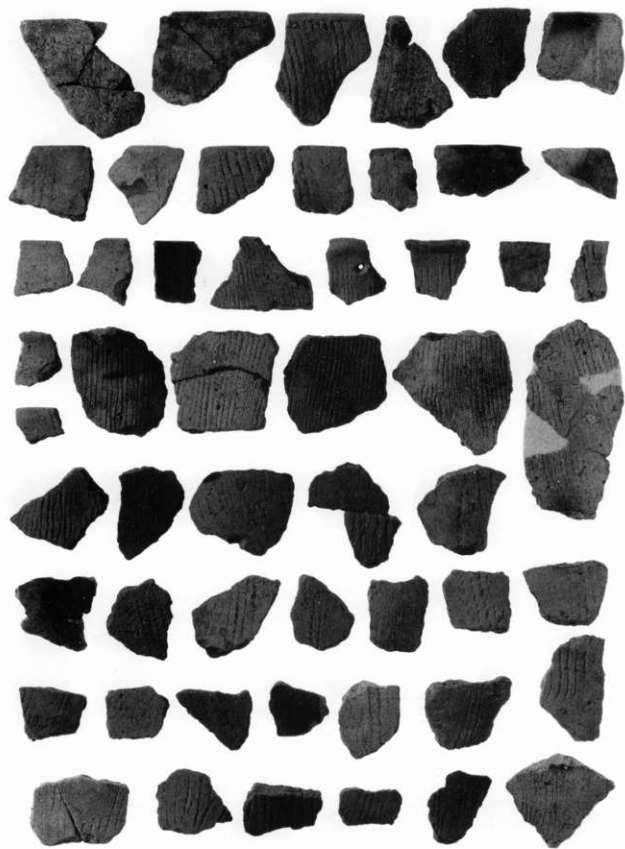


礫群2 4

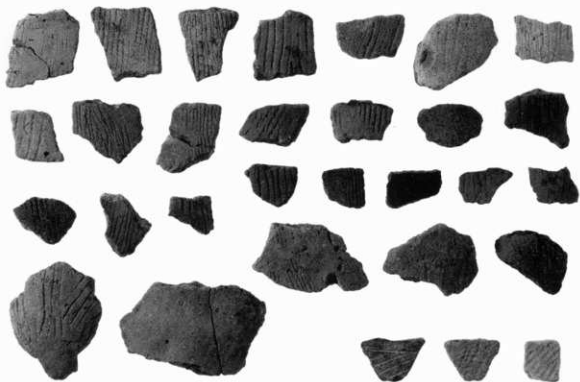


礫群6 1

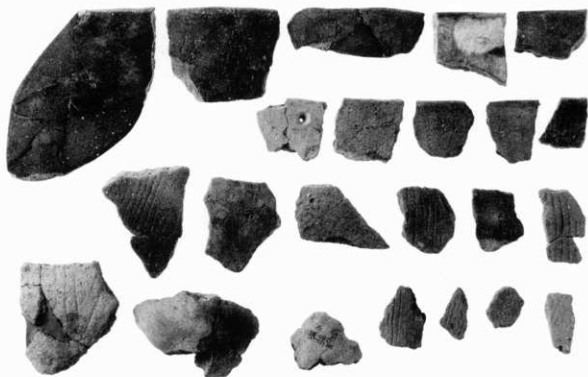
各礫群出土石器



グリッド等出土縄文土器(1)



グリッド等出土縄文土器(2)



群2 出土縄文土器



4F-46 1



礫群 2 1



礫群 2 2



礫群 5 3



礫群 1 1



4F-46 3



礫群 2 3



8T 2



8T 4

縄文時代出土礫石器



礫群 1 出土礫



礫群 2 出土礫



礫群 4 出土礫



礫群 3 出土土器



礫群 4 出土土器



SI-2 1



SI-2 4



SI-2 2



SI-2 5



SI-2 6



SI-2 3



SI-2 7



SI-2 10



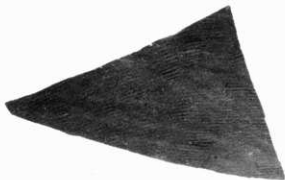
SI-2 9 (上・下)



SS-1 1



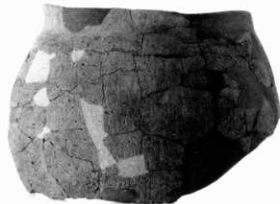
SS-1 2



SD-1 1



5E-60



5E-60・61



5E-60 3



5E-60 5



5E-60 4



4E-81 8



3T 9

古墳時代～奈良時代 出土土器 (3)

報告書抄録

ふりがな	きさらづしこやついせき
書名	木更津市小谷遺跡
副書名	大鷲木更津線埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第577集
編著者名	加藤正信
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043-424-4848
発行年月日	西暦2007年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こやついせき 小谷遺跡	きさらづしこやついせき 木更津市中島田字 おおつぼ 大坪86-11ほか	12206	033	35度	139度	20040106～ 20040227	4,422㎡	道路建設に伴う 埋蔵文化財調査
			033(2)	21分	56分	20050701～ 20050819	1,600㎡	
			033(3)	5秒	43秒	20060701～ 20060714	350㎡	
						合計6,372㎡		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小谷遺跡	包蔵地	旧石器	石器出土地点 2地点	剥片、石器	縄文時代早期～末文 期の遺物包含層と試 掘の竪穴住居跡・竪 穴が検出された。台 地上に展開する古墳 時代～奈良・平安時 代の集落・墓域の南 端部に当たり、集落 縁辺部の竪穴住居跡 2軒と方形環溝状遺 構1基が検出され た。
	集落	縄文	竪穴住居跡 1軒 陥穴 1基 土坑 4基 環溝 6地点	剥片、石器、礫、土器	
	集落	古墳時代～ 奈良時代	竪穴住居跡 2軒 方形環溝状遺構 1基 溝 2条	土師器、須恵器、 鉄製品	

千葉県教育振興財団調査報告第577集

木更津市小谷遺跡
—大鷲木更津線埋蔵文化財調査報告書—

平成19年3月23日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	千 葉 県 県 土 整 備 部 千葉県中央区市場町1-1
	財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株 式 会 社 豊 文 堂 茂原市早野1143番地